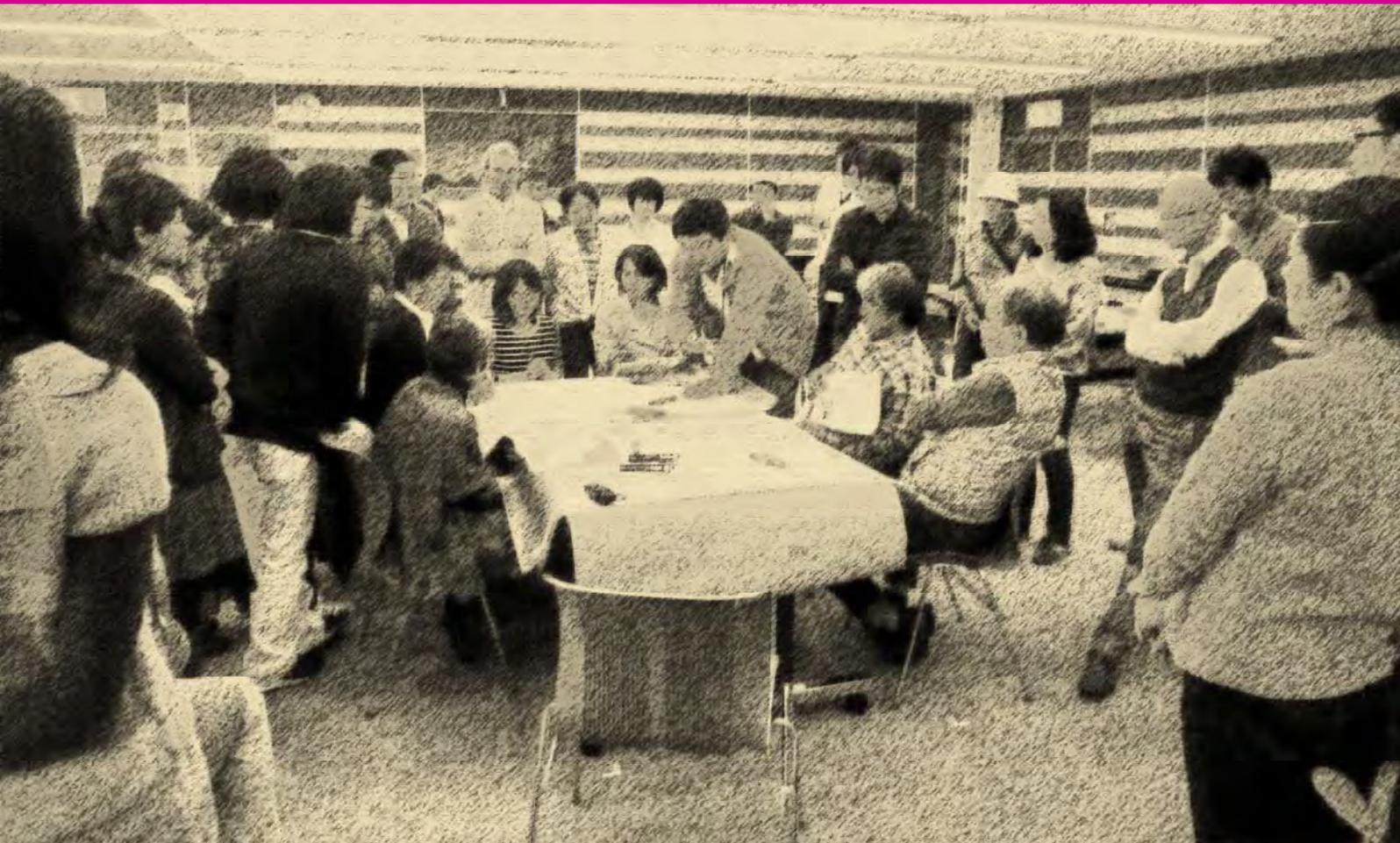




福岡市 野鳥公園基本計画
(基本コンセプト、活動プラン)



野鳥公園は誰のためにどうあるべきか？最初に浮かんだ問いである。
当然のことながら、野鳥が飛来しやすい空間であるべきことに間違いない。
一方で、人がどのように利用していくべきか、この議論も不可欠であろう。
一見すると相反するこの二つの命題に対して、どのように解答を見出していくのか。
そこで始まったのが、市民とともに自由に対話できる場、「野鳥公園ラウンジカフェ」である。
野鳥公園をつくるというプロセスにおいて、
市民に開かれたオープンな場における対話を繰り返してこそ、
新しいカタチの公共空間像を作り上げていく上で、
新たな展開を生み出していくのではないだろうか。
試行錯誤すること8回、延べ300人以上の方々から意見をいただき、
素晴らしい公園コンセプトが生まれた。

『成長する野鳥公園』

単に公園そのものの成長を意味するものではない。
公園が将来にわたり愛され続けていく時間の中で
そこに関わるすべての人が、共に成長していくプロセスに着目したい。
そして、今まさに、このラウンジカフェの場から野鳥公園の第1歩が始まっていたのである……

目 次

第Ⅰ章 基本計画の前提条件の整理	1
I-1 基本計画の目的	1
I-2 計画対象地の敷地条件等	2
I-3 野鳥公園整備に至る検討の経緯	12
第Ⅱ章 基本計画策定に向けた取組み	17
II-1 野鳥公園ラウンジカフェ	17
II-2 基本計画の体系	28
第Ⅲ章 基本コンセプト	29
III-1 基本コンセプト	29
III-2 基本方針	30
III-3 将来展開イメージ	32
第Ⅳ章 野鳥公園の活動プラン	33
IV-1 市民が求める野鳥公園のあるべき姿：ストーリーボード	33
IV-2 実現に向けた体系化	48
IV-3 実現に向けたスケジュール	49

第1章 基本計画の前提条件の整理

1-1 基本計画の目的

150万人を超える人が暮らす福岡市は、古来より国内外との交流や交易の舞台として、博多湾とともに発展してきた。この博多湾の東部に、毎年多くの渡り鳥が飛来する広大な干潟や浅海域がある。ここでは、クロツラヘラサギなど絶滅が心配されている貴重な鳥類や稚魚、貝類・カニなど多種多様な生きものが暮らしており、博多湾の豊かな自然を支える「命のゆりかご」としての機能を有している。

この貴重な「命のゆりかご」に、新たに生まれる野鳥公園においては、アイランドシティの埋立事業に伴い、鳥類等の生育環境保全の方策を講じることが求められている。

また、あらゆる世代の市民が気軽に利用できることはもちろん、アイランドシティ内やその周辺に住む人々が自然とともにある都市としての一体感を醸成すること、そして新たな社会のニーズや課題に対応し得る公共空間としての期待が込められている。多くの市民や多様な関係者が野鳥公園を通じて連携し、市民ぐるみで育てていくことにこそ、「命のゆりかご」を将来世代にまで継承しうる道すじであるといえる。

そこで本計画では、野鳥公園を整備するにあたり、平成18年策定の福岡市野鳥公園基本構想をはじめ、エコパークゾーン周辺環境の変化や様々な計画、提言などを踏まえ、野鳥公園整備の目的に沿った全体イメージや必要な機能、そして管理・運営の仕組みなどを盛り込んだ基本計画を検討することを目的とする。

計画の策定にあたっては、地域住民やNPO等の関係団体をはじめ、大学・学生、事業者、一般市民、行政など多様な主体が集う「野鳥公園ラウンジカフェ」を開催し、野鳥公園の整備や活用、管理・運営に向けた対話の場を創出する。



1-2 計画対象地の敷地条件等

(1) アイランドシティを取り巻く自然環境

福岡市は博多湾や豊かな自然環境に恵まれており、アイランドシティが位置する博多湾東部は、国内有数の渡り鳥の飛来地である和白干潟や稚仔魚を育む浅海域、海の中道の白砂青松の砂浜に代表される希少な海浜植物が生育する海岸、香住ヶ丘の岩礁・照葉樹林など変化に富んだ自然環境がある。

150万都市・福岡市にありながら、多種多様な生きものの命を育む豊かな生態系を支えるとともに、バードウォッチングや潮干狩りなど、身近な自然とのふれあいの場を提供する、福岡市の財産ともいえるべき価値ある空間である。

そして、環境教育の場として、驚きと感動とともに、自然環境のすばらしさ、生物多様性の大切さが実感され、生物多様性の恵みを活かしたふくおかの魅力の増進に努めるなど、福岡市ならではの環境形成を着実に進めていくことが求められている。



図：アイランドシティの位置

(2) 自然と人の共生をめざすエコパークゾーン

野鳥公園建設予定地は、550haにも及ぶ自然環境を擁するエコパークゾーンの中央部に位置し、福岡都心部からも近いアイランドシティ北側護岸沿いの約12haの場所である。

予定地の前面には、国指定和白干潟・多々良川河口鳥獣保護区に指定されている和白干潟(254ha)が広がり、周辺には、国営海の中道海浜公園や玄海国定公園があるなど、自然に恵まれた場所となっている。

平成元年の港湾計画で、博多湾東部の海や海岸、和白干潟等の自然環境を保全するため、これまで陸続き方式であった埋立計画を島方式に変更した。これにより保全された空間を、自然と人の共生をめざす「エコパークゾーン」と位置付けた。

エコパークゾーンは広大で様々な地域特性を有していることから、4つのゾーンに分けて地域ごとの特色を活かしながら、自然環境の保全・創造に向けた様々な取り組みを行っている。



図：エコパークゾーンの概要と野鳥公園計画予定地の位置

(3) 周辺自然環境とのネットワーク

博多湾東部に飛来する野鳥たちは、エコパークゾーンだけではなく、周辺の緑地帯や名島海岸、多々良川河口なども一体的利用を行っている。

野鳥公園予定地は、アイランドシティの中軸的緑地帯であるアイランドシティ中央公園及びグリーンベルトの一角をなし、また、アイランドシティ周縁部に整備が進められている外周緑地の一部にもなっており、さらには国指定鳥獣保護区の和白干潟に面する場所に整備する予定であることから、博多湾に訪れる様々な渡り鳥を観察することも期待できる。

このように和白干潟からアイランドシティや香椎パークポートの緑地帯、多々良川河口に至るまで、野鳥公園予定地を取り囲む「緑の回廊」が形成され、これらのネットワークと連携した野鳥の生息環境を創出する役割を担うことが期待されている。



図：周辺自然環境とのネットワーク

(4) 計画地の現況

計画対象地内は、調査時（平成25年5月）において、載荷盛土が残っている状態で、盛土の法面には、野鳥によって運ばれた種子から自生したと思われるアキグミやヌルデ、ネムノキなどによる樹林地や、管理用道路の境界部には塩生植物のハマボウなどがみられた。



①東側の親水護岸



②計画地内の状況



③計画地からグリーンベルト方向を臨む



④北側の直立構造護岸



⑤和白干潟方面への眺望



⑥牧の鼻への眺望



⑦北側海面に設置されているフロート



⑧和白干潟から計画地を臨む



⑨計画区域南側からの眺め



⑩盛土法面に自生するアキグミ等

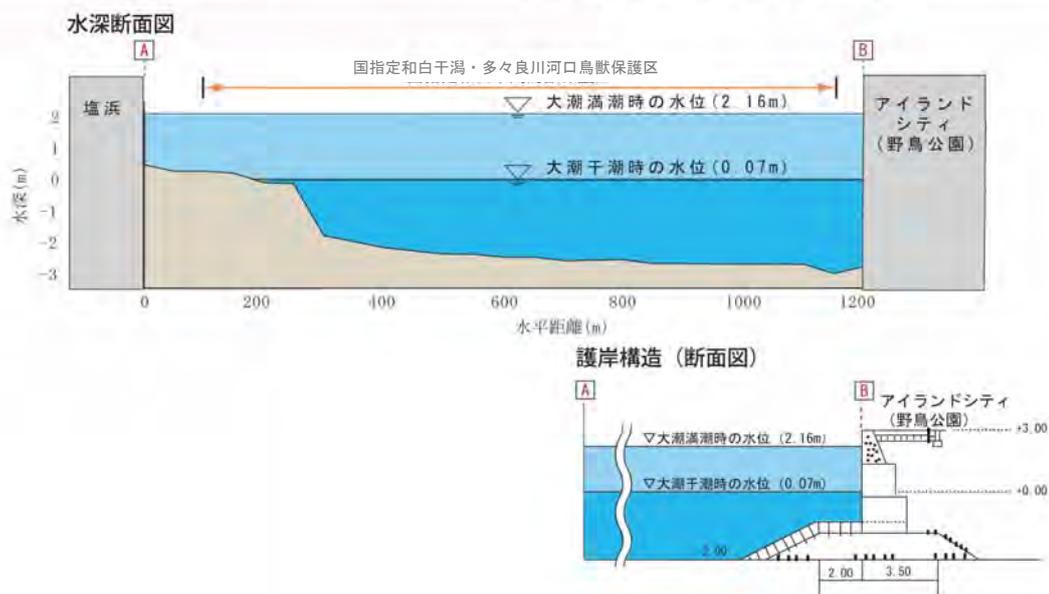
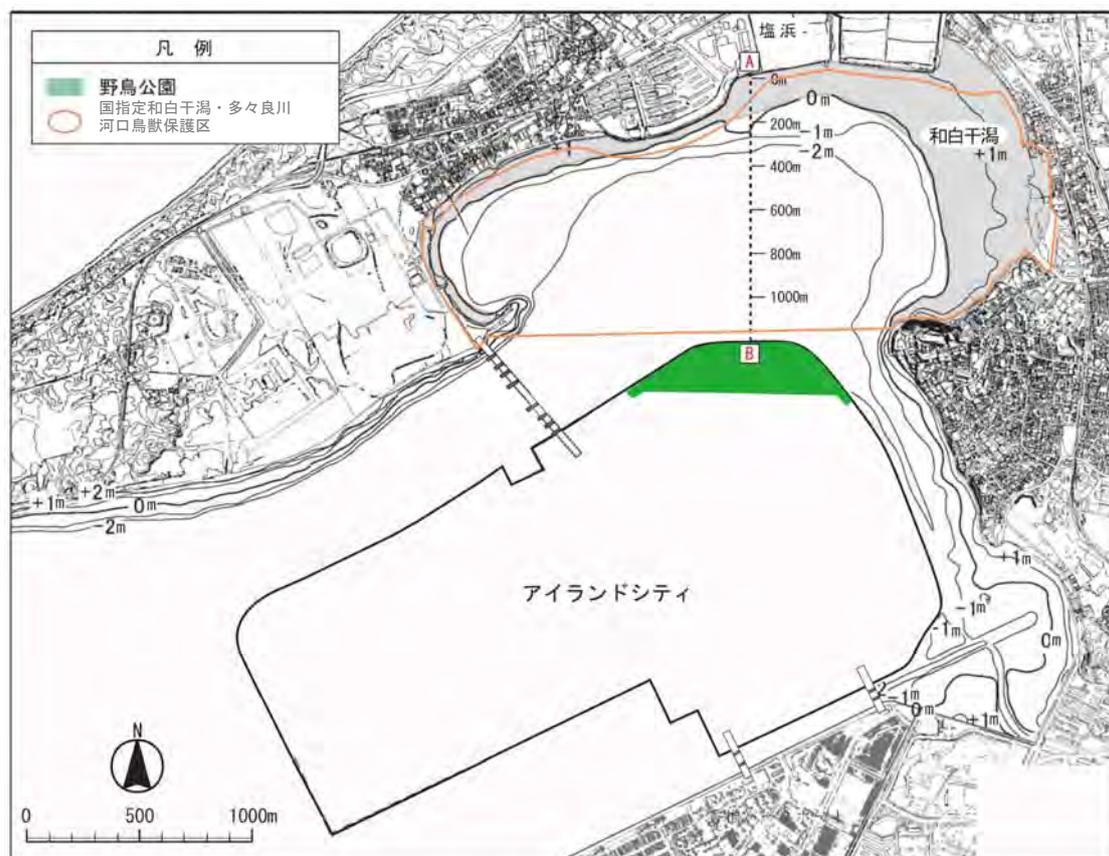


図：写真撮影位置図



(5) 周辺海域の水深、護岸状況

野鳥公園は、親水緑地として下図に示す約 12ha の範囲に設定されており、野鳥公園周辺の海域の水深はほぼ 3 m 未満と浅い。野鳥公園計画地における代表的な護岸構造は、護岸断面図に示す通りで、直立構造となっている。直立護岸と管理用道路については現状使用が条件となっている。



図：周辺海域の推進、護岸構造【出典：福岡市野鳥公園基本構想／平成18年5月】

(6) 外周緑地及びグリーンベルトの整備

現在、アイランドシティにおける整備事業として、野鳥公園に接続する外周緑地とグリーンベルトの整備が進められており、これらの事業との整合を図りながら計画検討を行う必要がある。



図：外周緑地の整備平面図／平成24年度

(7) エコパークゾーンで見られる鳥類

博多湾の東部地域には、近年、約 120 種、15,000 羽の野鳥が飛来している。当該地域で観察される野鳥の多くは水鳥であり、代表的な種類をあげると、渡りの中継地として春、秋に干潟を利用するシギ・チドリ類、繁殖のため夏季に砂礫地や浅海域を利用するアジサシ類、越冬地として冬季に長期間滞在し浅海域や干潟などを利用するカモ類、カモメ類、また留鳥として常時生息しているカルガモ、シロチドリ、ダイサギなどであり、世界的に個体数の減少が懸念されている希少種も多く含まれている。



図：エコパークゾーンで見られる鳥類【出典「エコパークゾーンガイドブック」】

1) 野鳥の湿地利用状況

国指定鳥獣保護区である広大な和白白干潟や浅海域を有するエコパークゾーンは、地球規模で旅をする渡り鳥の中継地や越冬地として重要な役割を果たしている。

アイランドシティ埋立工事中においては、航路の浚渫土砂などを使用した埋立工事で生じた一時的な湿地（以下「湿地」。）を多くの野鳥が利用していた。埋立地における湿地については、人や動物などの外敵が少なく、安心して休息できるとともに、潮の干満の影響を受けずにいつでも採餌できることから利用依存が大きいと考えられる。この状態が野鳥にとっては必要な機能であり、エコパークゾーンを含めた周辺環境全体で担っていくことが重要である。

アイランドシティ内の湿地及び和白白地区には、シギ・チドリ類や陸ガモ類をはじめとする多くの野鳥が生息しており（下表）、その利用は採餌と休息の大きく2つに分けることができる。

多くの種が、アイランドシティ内の湿地と和白白地区をともに採餌地・休息場として利用しており、距離も近いことから互いに行き来しているものと考えられる。また、アイランドシティ内の湿地及び裸地は、コアジサシの繁殖場所としても利用されている。

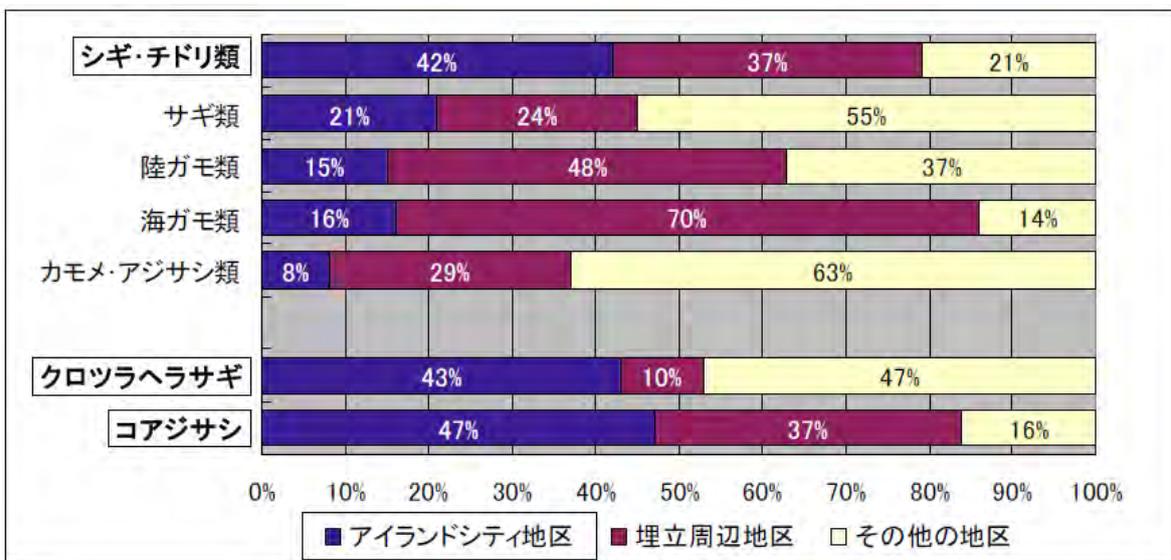
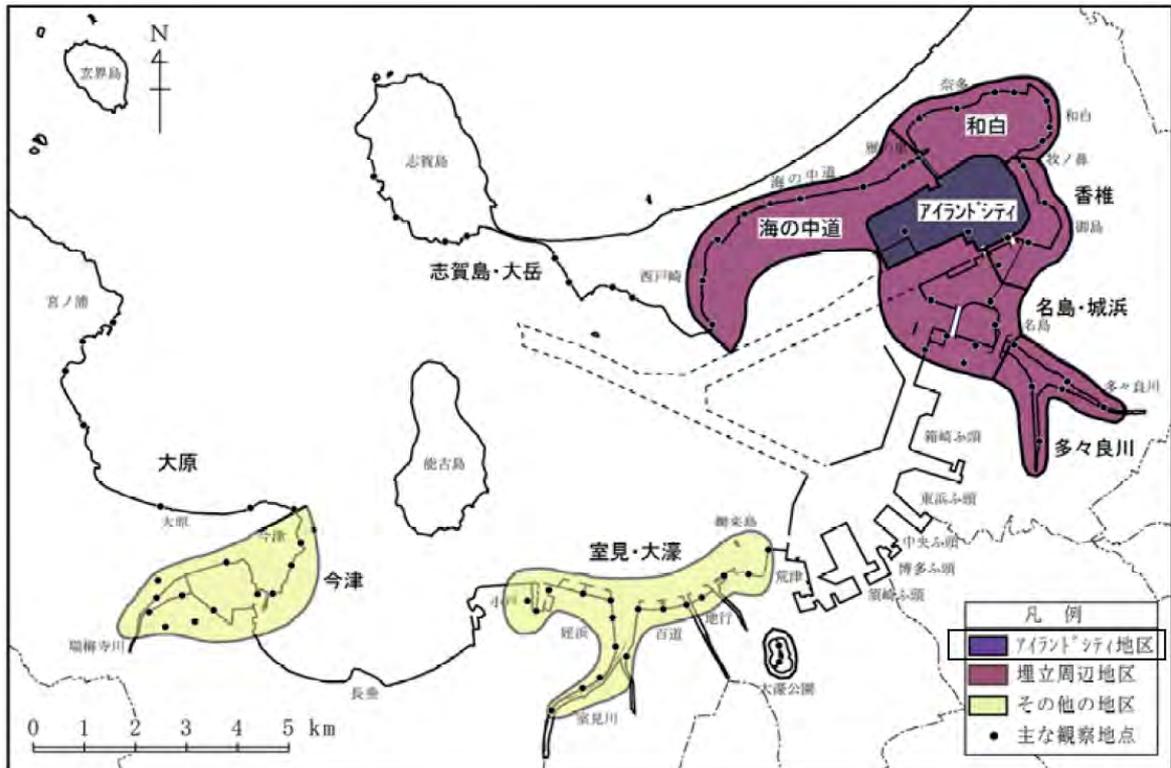
表：アイランドシティ内の湿地及び和白白地区における主な野鳥の利用状況

分類	種名	アイランドシティ内「湿地」利用状況	和白白地区利用状況	主な餌生物
シギ・チドリ類	ハマシギ	採餌・休息	採餌	小型底生生物
	シロチドリ	採餌・休息・(繁殖)	採餌	小型底生生物
	コチドリ	採餌・休息・(繁殖)	採餌	小型底生生物
	ダイシャクシギ	—	採餌・休息	大型底生生物
	ダイゼン	休息	採餌・休息	小型底生生物
サギ類(クロツラヘラサギ含む)	クロツラヘラサギ	採餌・休息	採餌	魚類、甲殻類
陸ガモ類	ツクシガモ	採餌・休息	採餌・休息	大型底生生物、魚類
	オナガガモ	採餌・休息	採餌・休息	小型底生生物、水草、種子
	マガモ	採餌・休息	採餌・休息	水草、種子
	コガモ	採餌・休息	採餌・休息	種子など
	ヒドリガモ	採餌・休息	採餌・休息	海藻など
	ハシビロガモ	採餌・休息	—	プランクトン、種子
	カルガモ	(繁殖)採餌・休息	採餌・休息	水草、種子
海ガモ類	スズガモ	休息	採餌・休息	大型底生生物
	ホオジロガモ	採餌	採餌・休息	大型底生生物、小型底生生物
	ホシハジロ	採餌・休息	採餌・休息	大型底生生物、水草
	キンクロハジロ	採餌・休息	—	大型底生生物、水草
	ミコアイサ	採餌	—	大型底生生物、魚類
カモメ・アジサシ類	コアジサシ	繁殖、採餌・休息	採餌	大型底生生物、魚類

本データは、平成20年2月の1日調査結果（平成19年度 鳥類保全対策調査業務委託報告書（福岡市港湾局））から作成したものであり、年間の行動体系を整理したものではない。また、専門家へのヒアリングにより、一部追記している。

2) 湿地に対する野鳥の依存度

「アイランドシティ整備事業環境監視結果（以下「環境監視結果」。）（平成16～18年度）」によると、野鳥の種ごとの湿地依存度については、博多湾に飛来するシギ・チドリ類やクロツラヘラサギの約4割がアイランドシティ地区を利用しており、湿地への依存度が高くなっている。さらに、裸地で営巣等を行うコアジサシについても、約半数がアイランドシティ地区を利用しており、湿地を含むアイランドシティへの依存度が高くなっている。



図：博多湾全体での野鳥の利用割合【出典：エコパークゾーン環境保全創造計画】

3) 湿地に対する依存度の高い野鳥の利用状況

シギ・チドリ類は、平成16～18年度の環境監視結果によると、年間延べ1万羽弱が博多湾に飛来し、そのうち42%がアイランドシティ内の湿地を利用している。

シギ・チドリ類は海面に浮かぶことができないため、満潮時など潮位が高いときに休息する場所が必要である。昭和60年頃は箱崎水面貯木場や塩浜の農地を休息場として利用していたが、平成5年頃にそれらがなくなったことから、代わりに香椎パークポート内の湿地を利用し始め、現在はアイランドシティの湿地を利用している。

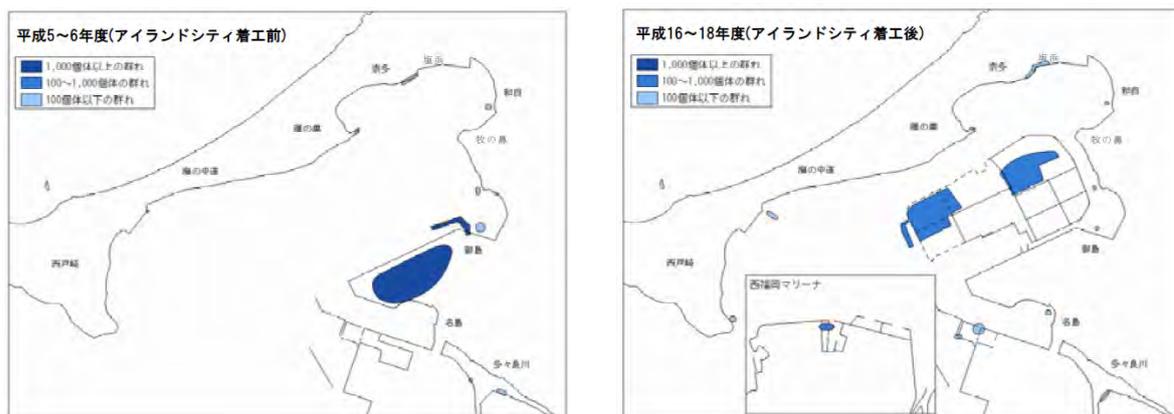


図:シギ・チドリ類の個体数別分布図(休息)(環境監視結果)【出典:エコパークゾーン環境保全創造計画】

世界的に希少な種であるクロツラヘラサギは、平成16～18年度の環境監視結果によると年間延べ300羽程度が博多湾に飛来し、そのうち43%にあたる約130羽がアイランドシティ内の湿地を利用している。湿地消失後の保全対策については、エコパークゾーンにはクロツラヘラサギが好む泥干潟が存在しないため、エコパークゾーンに限らず博多湾に存在する各干潟の特長を活かし、本来の生息環境である多々良川河口の干潟域や今津干潟で保全することが最適であると考えられる。

春から初夏にかけて博多湾に飛来しているコアジサシについては、近年、埋立地での営巣が確認されているところであるが、コアジサシは平成16～18年度の環境監視結果によると年間延べ2,500羽程度が飛来し、そのうち47%にあたる約1,200羽が工事中の裸地や湿地などのアイランドシティを利用している。コアジサシは、年ごとに営巣場所や個体数の変動が大きい種であることから、その変動に対応していけるよう、これまで多くの営巣が確認されている海の中道の砂浜など既存の繁殖地をしっかりと保全していくことが重要となる。

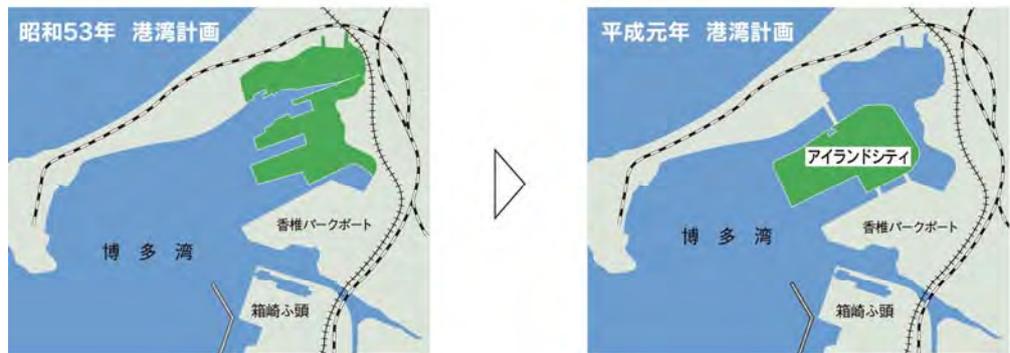
1-3 野鳥公園整備に至る検討の経緯

野鳥公園及びアイランドシティ、エコパークゾーンについては、平成元年7月の港湾計画改定を起点として、下記に示す検討が重ねられてきた。

平成元年7月

港湾計画改定

- 博多湾東部の海や海岸、和白干潟などの自然環境を保全するため、陸続き方式から島方式への変更
- 緑地計画の中で親水緑地として位置づけ、レクリエーションの場として市民が水に親しむことのできる緑地の整備を図る



図：陸続き方式から島方式への変更

平成4年9月

アイランドシティ基本計画

- 緑地計画の中で親水緑地として位置づけ
- 立地特性を生かし、野鳥観察などを通して市民が気軽に身近な自然とふれあうことができる空間を創出

平成5年4月

アイランドシティ整備事業 環境影響評価書

- 和白干潟及びその前面海域と一体となった鳥類の生息環境を保全し、新たな快適環境を創出していくために、和白干潟に面した親水緑地を湿地、磯浜、池、海浜植物等を備えた「野鳥公園（仮称）」として整備する

平成6年5月

アイランドシティ整備事業 公有水面埋立免許取得

- 運輸省（現国土交通省）港湾局長の指導「野鳥公園を含むエコパークゾーンについては、鳥類等の生息環境として保全するための方策を講じること」

平成9年5月

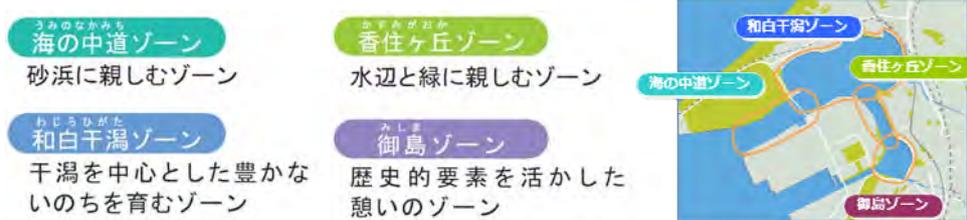
エコパークゾーン整備基本計画

- 基本的な考え方として、「豊かな生態系を構成する生きものを育む場として、自然環境の質的向上を図るとともに、地域の特性を活かした潤いのある生活環境の形成や環境教育の場としての利用を行うなど、自然生態を活かした整備を図る」としている

- 自然、人、都市の3つの視点をもとに基本方針を設定している

自然：豊かな生態系を創造する空間の整備
 人：潤いのある生活環境を創造する空間の整備
 都市：海を活かした都市の資質を創造する空間の整備

- エコパークゾーンを地域ごとの特色を活かすため、4つのゾーンに分類し、それぞれのゾーンの位置づけを以下のように示している



平成18年5月

野鳥公園基本構想

- 野鳥公園整備の基本的な方向性について、学識経験者や地域住民、公募市民など20名で構成される委員会から野鳥公園の基本的なあり方について市長へ提言

【提言の主な内容】

「エコパークゾーンとの一体的な整備」が不可欠

1)整備の視点

- ・ 生物生息空間の創出
- ・ 自然環境を身近に感じられる空間の創出
- ・ 中核機能の創出

2)実現に向けて

- ・ 構想の推進体制のあり方
- ・ 構想の推進方法等
- ・ 関係機関との調整など



図：野鳥公園とエコパークゾーンとの一体的整備のイメージ図

- エコパークゾーンにおける中核機能をなし、生物生息空間を創出する
- 初期段階では基本的な整備のみ行い、その結果を見ながら必要な整備を追加していく（順応的管理手法）など柔軟な対応が必要
- 自然環境が安定し生物が定着するまでに一定の時間が必要となるので、長期的な視野に立って取組むとともに、実現可能なものから段階的に整備していくことが重要
- 「環境共生」、「健康」、「みんなで関わる」を具現化できる空間として、福岡市にとってシンボリックな存在とする

平成 21 年 12 月

アイランドシティ事業計画

- アイランドシティのまちづくりの方向性である「みんなで関わる」を実践する場の一つとして様々な主体が連携しながら運営に関わっていく
- アイランドシティの魅力向上の一翼を担う

平成 22 年 3 月

エコパークゾーン環境保全創造計画

- エコパークゾーン内の4つのゾーンの将来イメージの実現をめざして、今後どのような施策を講じていくべきかについてとりまとめたもの

1) 和白海域環境改善対策[和白干潟ゾーン]

エコパークゾーン整備基本計画で位置づけられた水質・底質の改善施策等が未実施であり、同ゾーン内の環境特性に応じた環境改善対策を講じていく必要がある。

2) 鳥類保全対策[和白干潟ゾーン]

将来、野鳥公園の整備が予定されており、豊かな自然環境の保全創造に向けて、鳥類の生息状況や利用状況を踏まえながら、必要な保全対策を講じていく必要がある。

3) ソフト施策[エコパークゾーン全体]

エコパークゾーンの環境を将来にわたって保全し、さらに活かしていくという発想が重要であり、ワイズユース*の視点を持って、多様な主体と連携・共働しながら、ソフト面での施策の充実を図る必要がある。

※ラムサール条約による位置づけ「持続可能な開発の考え方に立って、生態系アプローチの実施を通じて、その生態学的特徴の維持を達成することである」



図:エコパークゾーンのゾーン区分図

平成 23 年 12 月

アイランドシティ・未来フォーラム

- これからの社会を展望した福岡の未来を先導する事業としてのアイランドシティの課題と可能性について検討し、今後、事業を進めていく方向性を示すテーマ、未来像、及びその実現に向けた方針と戦略、施策として、要点を体系的に整理、提言したもの
- 博多湾の豊かな自然との共生や創エネ・省エネを推進する「スマートコミュニティ」の推進や、アイランドシティの強みを活かした核となる公共施設として、**自然を再生し、人々に親しまれる野鳥公園の早期着手**が提言されている

平成 24 年 5 月

生物多様性ふくおか戦略

- 多くの生物が複雑に絡み合い構成されている生物多様性を維持・向上していくために、長期目標の 100 年後を見据えつつ、当面 10 年程度の取組みをとりまとめている
- **生物多様性に関する教育・学習の推進**
野鳥公園を活用した環境教育や体験学習の推進、環境教育・体験学習プログラムの充実、農林水産業における学習機会の提供などに取り組む
- **自然環境の再生・回復の推進**
野鳥公園の整備、水質の改善や干潟の保全、多自然護岸の整備、さらには、機能が低下した森林や農地の保全・活用などに取り組む

1) 戦略の理念

- ① すべての生命が存立する基盤を整える
- ② 人間にとって有用な価値を持つ
- ③ 豊かな文化の根源となる
- ④ 将来にわたる暮らしの安全性を保証する



2) 100 年後の将来像

市民が多様な生き物とその生息地である自然環境の保全・再生・育成に取り組み、百年後も豊かな自然と共生し、その恵みに支えられ、命をつなぐ未来都市「ふくおか」

3) 施策の基本的方向

- ① 生物多様性やその恵みに関する認識の社会への浸透
- ② 人と自然の環境を改めて考えながら生物多様性の保全
- ③ 生物多様性から享受される恵みの持続可能な利用
- ④ 生物多様性に支えられる文化の継承と創造
- ⑤ より広域な視野をもちながら地域の生物多様性を支える多様な主体や地域との連携

平成 24 年 8 月

博多港長期構想

- 「博多湾長期構想検討委員会」が、博多港の 20～30 年後の将来を展望する長期的な指針として、将来像やその実現に向けた取組みをまとめている
- エコパークゾーン全域を **人と自然が共生する大規模な野鳥公園** ととらえ、国内外に発信できるような **新しい環境モデル** を構築する
- 環境の保全と創造の取組みにおける、 **市民との共働プロセス** を構築及び実施する

博多湾の将来像と戦略〈環境に関して〉

【環境戦略① 低炭素物流ネットワークの構築】

港湾活動による環境負荷の低減や、低炭素物流ネットワークを構築する拠点づくりを進めていく。

【環境戦略② 環境の保全と創造の取組み】

市民と共働で、博多湾の魅力ある環境の保全と創造に取り組んでいく。



平成24年8月 博多港長期構想より抜粋

平成 24 年 11 月～
平成 25 年 12 月

野鳥公園ラウンジカフェ

第II章 基本計画策定に向けた取り組み

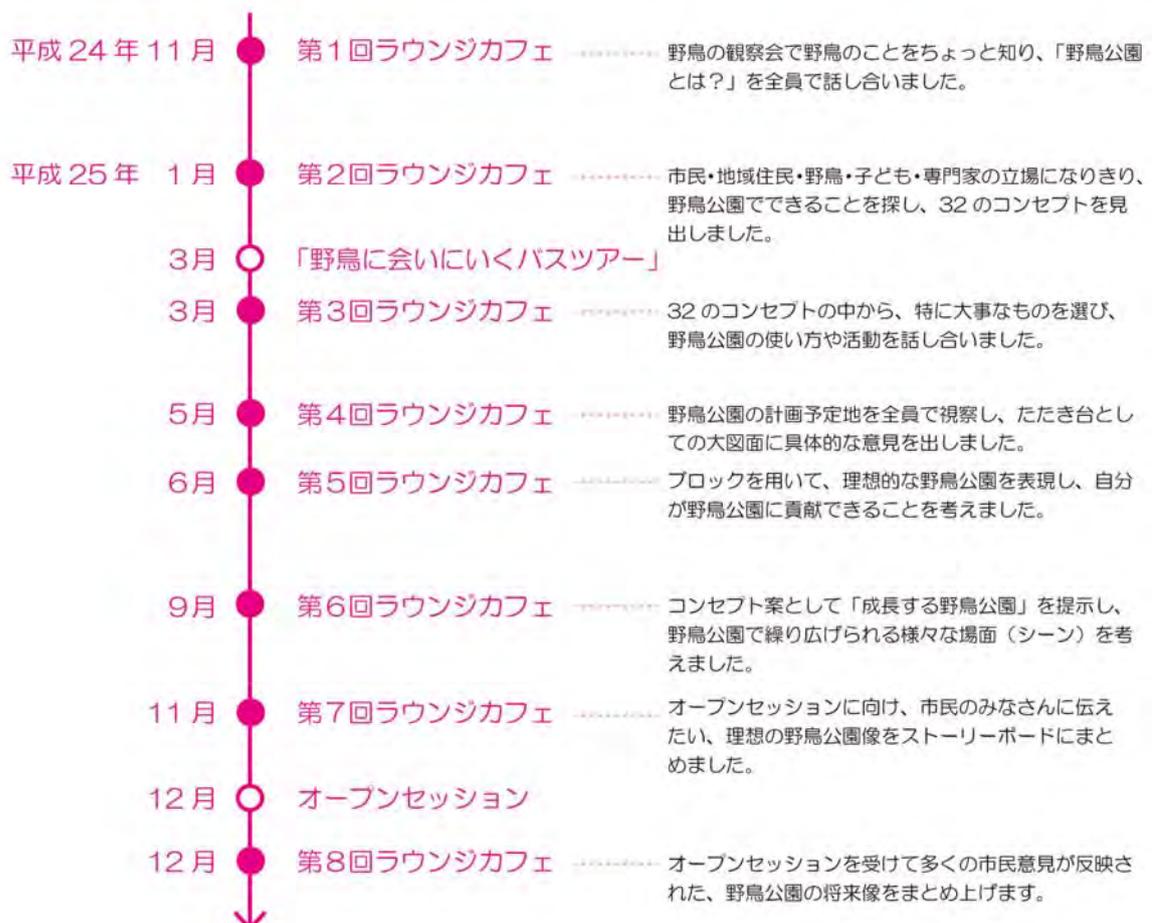
II-1 野鳥公園ラウンジカフェ

(1) 主旨

野鳥公園ラウンジカフェ（以下、「ラウンジカフェ」とする）は、多様な主体からの多くの意見を取り入れながら検討を進めることを目的として、NPO等の関係団体をはじめ、大学・学生、事業者、一般市民、行政などによる協議・情報集約・発信の場である。従来の公園づくりのワークショップなどで求めてきた、基本プラン等に対する択一的な合意形成を求めるのではなく、参加者が意見の多様性を知ることにより、そこに新たな気づきやアイデアを求めようとしたものである。ラウンジカフェは平成24年11月から全8回開催し、延べ321人が参加した。参加者は自由に意見交換を行いながら、野鳥公園の整備や活用、運営に向けて語り合ってきた。



ラウンジカフェの経緯



第2回(H25年1月19日(土)13:00~16:00)テーマ:「〇〇ができる野鳥公園」を考えよう!!

内 容:野鳥公園での様々な活動、野鳥にとっての空間の在り方等の視点から、「あなたなら野鳥公園で何がしたいか?」、「子どもたちのためにはどんなことができる空間が必要か?」、「野鳥のためにはどんなことができるのか?」など、「(誰が)〇〇ができる野鳥公園」という視点で話し合う。参加者は、地域住民、市民、専門家、野鳥などの立場になりきり、その立場の中で議論を行う。

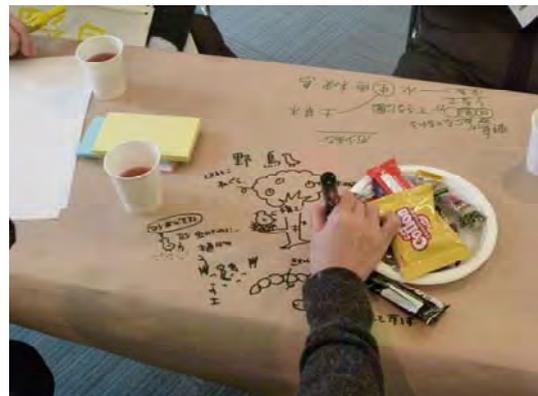
それらを参加者全員で共有する。さらに、自分の出したアイデアや他の参加者が出したアイデアを実現していくために、自分自身が主体的に取り組めることはないだろうかということを考えてみる。

成 果:野鳥公園といっても、様々な形、様々な機能があることに気がつく。理想の野鳥公園を実現するためには、市民や企業の主体的な関わりが必要であることに気がつく。

第2回では、野鳥公園に関係する様々な立場になりきって意見交換を行うことで、プログラムなどのソフト面だけではなく、整備に関するハード面の検討へとつながるキーワードや意見を多く得ることができた。



それぞれの役になりきって議論中



テーブルクロスに次々と書きとめられるアイデア



参加者が見守る中での代表者ディスカッション



アドバイザーからのコメント

野鳥に会いに行くバスツアー(H25年3月9日(土)8:45~17:30)

内 容：一般公募による山口県立きらら浜自然観察公園へのバスツアーを行った。41名が参加し、当日は現場でインタープリター(ガイド役)の解説を聞きながら、園内を散策し、様々な野鳥に出会うことができた。

成 果：今後の野鳥公園整備の中における設計条件を検討する際の示唆を得ることができる。

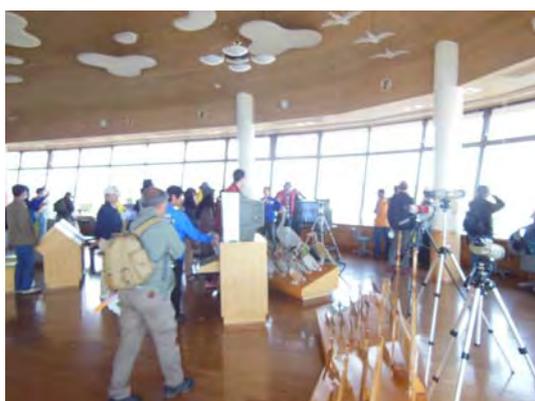
敷地内は淡水池、汽水池、干潟、ヨシ原といった多様な野鳥のための環境を創出しているが、干潟の水の流れの不足によるヘドロ化や汽水池の維持管理の困難さといった問題も多く抱えており、今後の維持管理の中で、どのように対応していくかといった課題からは、今後の野鳥公園整備の中における設計条件を検討する際の示唆を得ることができた。



アイランドシティ中央公園での野鳥観察



インタープリターによるきらら浜の解説



ビジターセンターからの野鳥観察



広大な園内を散策

第3回(H25年3月16日(土)13:00~16:00)テーマ:「〇〇ができる野鳥公園」をみんなで実現しよう!!

内 容:野鳥公園のコンセプトを提示する。詳細なディテールの議論を行うのではなく、空間の大まかな使い方や、人と野鳥の境界をどのように考えるのかという、コンセプトを表現したダイアグラムの提示にとどめる。

複数のコンセプトが提示されてくる中で、必要なもの、必要でないものを話し合いながら、いらないものを削っていく作業を行う。アフターカフェでは、サンドウィッチなどの軽食を準備。よりリラックスした雰囲気の中で、次年度へ向けた想いを自由に語り合ってもらおう。

成 果:コンセプトに対する意見収集を行い、大まかな基本方針が定まる。次年度に向けての参加意欲を高めてもらう。

今回、各グループから出された野鳥公園のコンセプトをすりあわせ、その内容を全体で共有したうえで、野鳥公園の設計条件を固めていく必要があることが確認された。



コンセプト案を3つに絞り込み中



代表者ディスカッションの様子



代表者ディスカッションに視線が集中!



図面を使って配置の検討

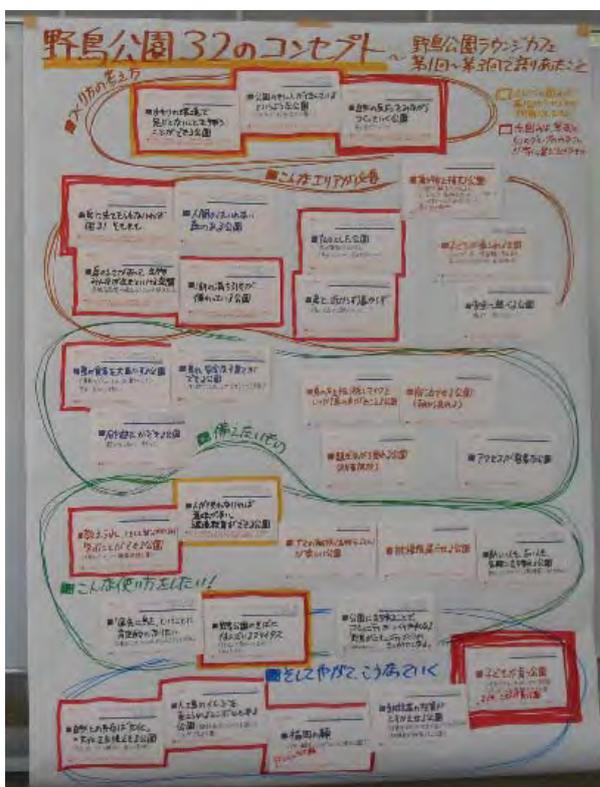
第4回(H25年5月25日(土)12:30~15:00)テーマ:「野鳥公園で誰と何をしたいか」

内容: ラウンジカフェの開催前には、予定地を約1時間視察し、公園予定地のスケールや周囲との環境の関係性を感じてもらった。

ラウンジカフェ前半では、過去に議論された野鳥公園基本構想のプランを下敷きに、昨年度ラウンジカフェで整理された「野鳥公園32のコンセプト」を参考にして、床に広げた巨大な「プラン案」を見てもらった。

後半は、ワールドカフェ方式で「この野鳥公園で誰と何をしたい?」というテーマのもと、意見交換を行った。

成果: 周辺環境との関係からみた野鳥公園の役割、野鳥との共生について考える視点ができる。実際に図面に描きこむことで、周辺環境との関係性や管理施設の形状なども話しやすくなる。予定地視察を終えて、本当に干潟が必要なのか、ここに干潟をつくる意味はなんだろう? という議論に展開してきた。実際に図面に描きこむことで、周辺環境との関係性や管理施設の形状なども話しやすくなるという効果が得られた。



野鳥公園32のコンセプト



載荷盛土の最頂部からは、博多湾が一望できた



図面の上に出て市民が思い思いの意見を書き込む。

第5回(H25年6月16日(日)12:30~18:00)テーマ:「理想的な野鳥公園を考えよう」

内 容: 第5回では、レゴ®シリアスプレイという問題解決手法を取り入れた。「“とんでもない”野鳥公園」「“理想的”な野鳥公園」などのテーマに基づき、各人がアイデアを作品として創り、他のメンバーは作品を様々な視点から観察し、質疑応答を交わすことで、お互いのアイデアの完成度を挙げていった。

成 果: 三次元モデル(ブロック)による議論により、参加者が野鳥公園にもつ価値観(内観)の発見と共有を効果的に促すことができる。そのプロセスを通じて、理想的な野鳥公園を実現していくために、野鳥と利用者の空間の棲み分けを行うなどの共生に向けた整備の必要性や、整備後も関係者が野鳥公園に関わりを持ち育てていくことの必要性に気付く。

理想的な野鳥公園を実現していくための障壁となるものや、理想的な野鳥公園に向かって皆さん自身ができること、必要なことが共有された。



自分の作品で伝えたいことを話し合う



班共同の作品のプレゼン



各班が思い描く「理想的」な野鳥公園



第6回(H25年9月21日(土)10:00~12:30)テーマ:「野鳥公園の場面を描こう」

内容: 第5回までのラウンジカフェを振り返り、コンセプトとして「成長する野鳥公園」が提示され、基本的な方向性と目指すべき将来像が説明された。それをもとに、今後はより具体的な将来イメージを検討するため、野鳥公園で展開されるシーン(場面)を話し合った。

成果: 単に野鳥公園の整備のあり方を話し合うのではなく、野鳥公園でどのような具体的な活動をしたいか、そのために必要な機能は何かといった切り口から市民が求める野鳥公園の将来像を導く。

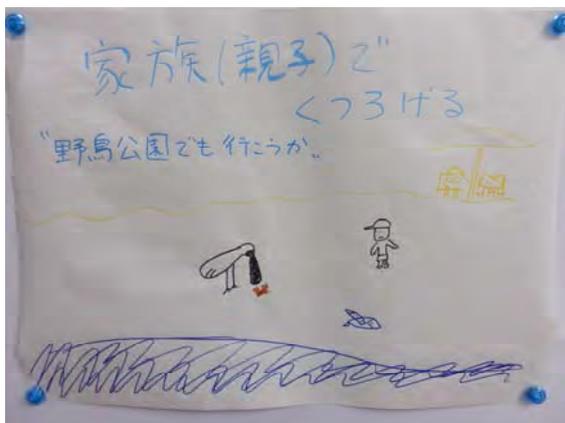
ストーリーボードの中に盛り込みたいシーン(場面)を考える中で出された、キーワードとなる言葉や絵、図により、参加者が思い描く野鳥公園の将来像が見えてきた。



ストーリーボードのイメージ



ストーリーボードで表現したいシーンについて
アイデアを出していく



参加者のアイデアの一つ。これでは家族で気軽に楽しめる場所であることを伝えている



ストーリーボードに盛り込みたいシーンやキーワード、コンセプトが描かれた市民意見

第7回(H25年11月2日(土)13:00~17:00)テーマ:「ストーリーボードをつくろう」

内 容: 第6回ラウンジカフェに引き続き、野鳥公園で展開されるシーン(場面)について具体的な検討を行った。第6回までに出された様々なアイデアをまとめたスケッチとストーリーからなる約20枚のストーリーボード(案)を一枚ずつ確認し、必要とするアクティビティの精査や多くの人に分かりやすく伝えるためのシーン(場面)の表現について肉付けを行った。

成 果:全体で、野鳥公園でのアクティビティと市民にわかりやすく伝えるためのシーン(場面)を精査することで、野鳥公園の将来像の共有を行う。

イメージボードのたたき台を精査することで、参加者が話し合ってきた野鳥公園の将来像を確認するとともに、野鳥公園に求める機能を明確にした。



前回のラウンジカフェの成果をもとに事務局で作成したイメージボード案を確認する



市民が伝えたい野鳥公園の将来像や必要な機能について話し合う



伝えたいことを大勢の人にわかりやすく、絵やキーワードで表現していく



さらにイメージボードに盛り込みたいアイデアを描きこんでいく



オープンセッション(H25年12月16日(月)~21日(土)10:00~20:00)

内 容：ラウンジカフェで導き出されたコンセプト「成長する野鳥公園」に基づき、野鳥公園とそこに関わる人々が成長していくプロセスを「ストーリーボード」として表現し、より多くの市民の方々が野鳥公園の将来像について思いを馳せる機会として、「野鳥公園オープンセッション」を開催した。

オープンセッション最終日には、「生きものと私たちのくらしトーク・カフェ」が同時開催され、『身近な生きものへの「まなざし」』をテーマに、「食」や「農」など、市民に身近な切り口から意見交換も行われた。

成 果：ラウンジカフェに参加していない数多くの市民にもラウンジカフェの取組みに関心をもってもらうとともに、広く市民の声を収集する。

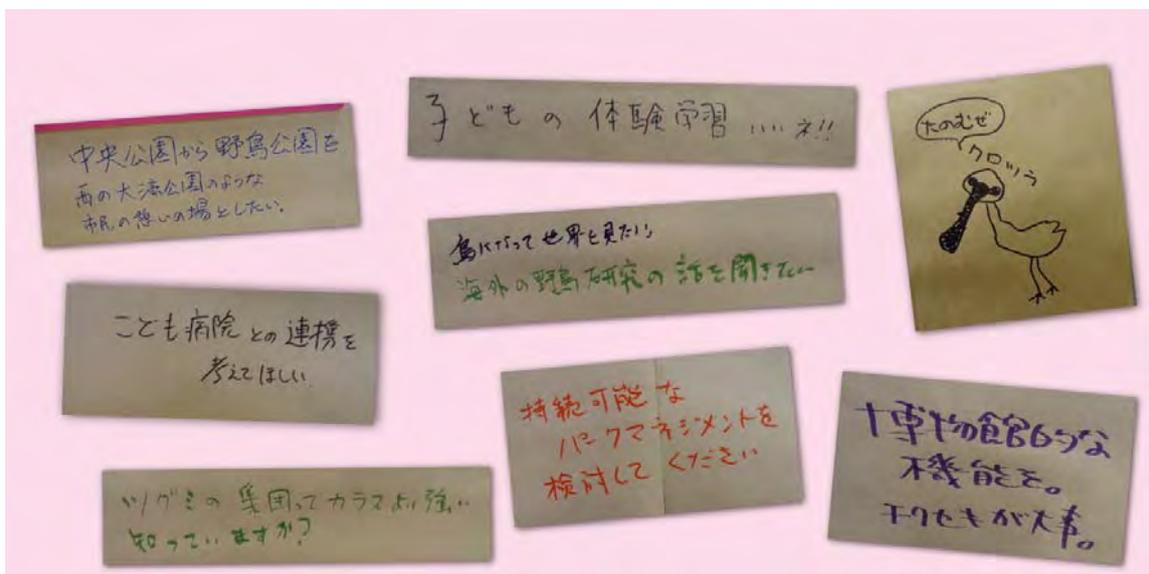
内容に共感したものや新たなアイデア、意見・要望など様々なコメントが計46件集まった。



市役所ロビー1階にオープンセッションの会場を設置



オープンセッション会場で行われた「生きものと私たちのくらしトーク・カフェ」の様子



オープンセッション期間中に訪れた市民から得た意見やアイデアの一部

第8回(H25年12月22日(日)13:00~16:00)テーマ:「野鳥公園の将来像をカタチにしよう」

内 容: これまでのラウンジカフェを振り返りを行ったうえで、今後、自分がどのように関わりたいと思うか、意見交換を行った。

ワールドカフェの中で、様々な人と意見交換をする中で考えた野鳥公園に対する自分自身のテーマについて発表を行った。自分の日常生活や趣味、仕事などを踏まえたいろんな思いを聞くことができた。

成 果: 公園が整備されたら終わりというわけではないことを共有し、完成後のパークマネジメントを見据え、参加者それぞれの立場から公園づくりに積極的に参加する意欲を醸成する。

野鳥公園に対する思いは様々であったが、「野鳥公園ラウンジカフェを継続し、今後も見守っていきたい」という声が多く聞かれた。



これまでのラウンジカフェを振り返りながら今後のことを話し合う



ワールドカフェで席替えをしながら、いろいろな人の意見が重ねられていく



野鳥公園に対する自分自身のテーマを発表

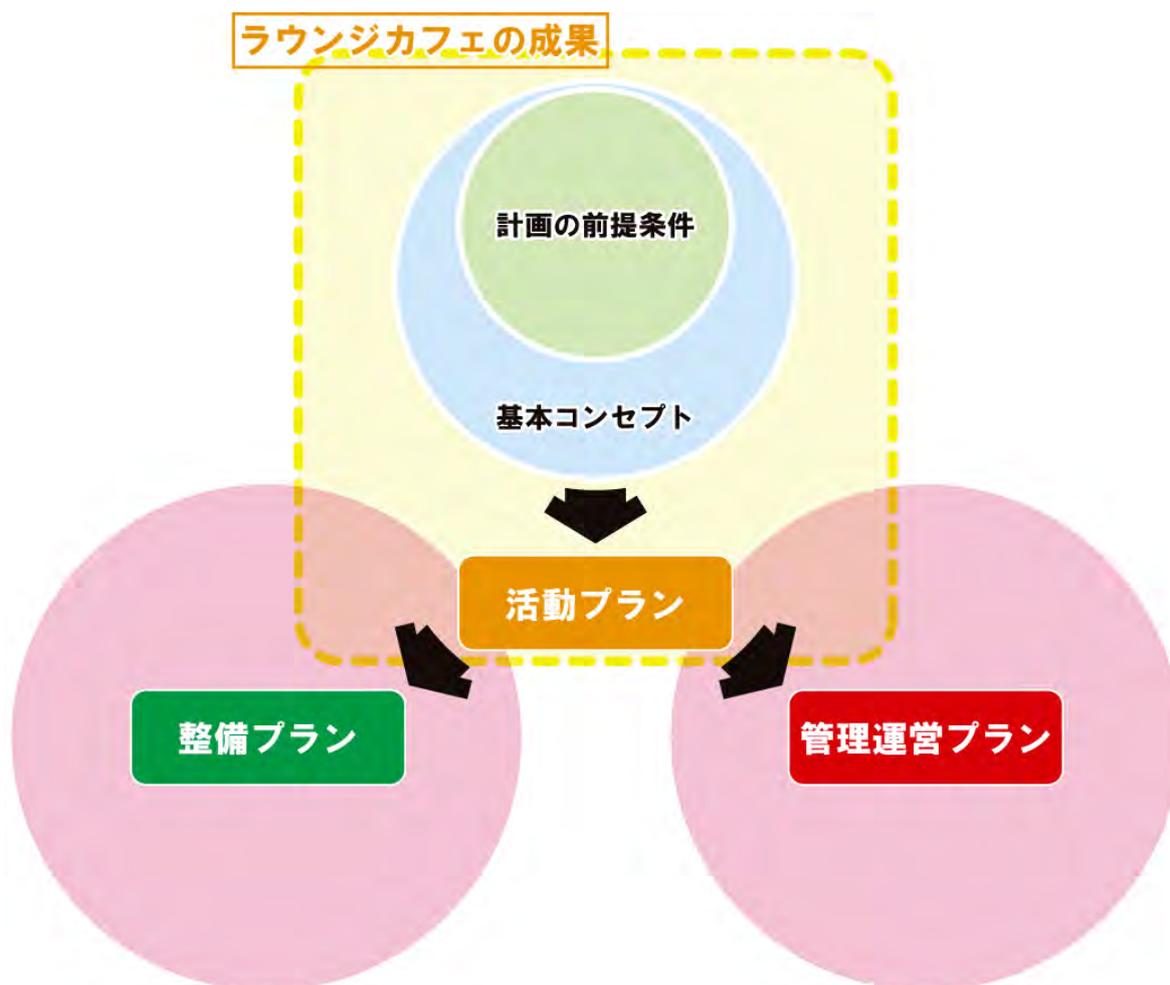


今後もラウンジカフェに何らか関わっていきたいという声が多く聞かれた

II-2 基本計画の体系

本計画においては、過去から検討してきた内容を計画の前提条件として整理し、ラウンジカフェでの市民意見を踏まえて、基本コンセプト及び活動プランの策定を行った。

活動プランは、イメージシーンとそれを実現するための多様なアクティビティにより構成されており、この活動プランに基づき、整備プラン、管理運営プランへと展開していく。



図：基本計画の体系図

第Ⅲ章 基本コンセプト

Ⅲ-1 基本コンセプト

第Ⅰ章にて整理した前提条件、第Ⅱ章にて実施したラウンジカフェの取組みを踏まえ、基本コンセプトを以下のように設定した。

あなたが思い浮かべる野鳥公園は、どんな空間ですか？

訪れた人たちが、野鳥を身近に感じ、鳥がいる自然環境の素晴らしさを感じることができる空間。

生物多様性の大切さを知り、驚きや感動を体感することのできる空間。

アイランドシティというまちの魅力を向上させ、新たな価値を生み出す空間。

そして、周辺に広がるエコパークゾーンへとつながる空間。

野鳥公園は、皆さんが思い描く様々なアクティビティを実現する空間でもあります。

野鳥公園は**成長**します。それは野鳥公園に限られた立場や世代のための空間ではなく、皆さんの成長にあわせた多様性が生まれる場所だからです。野鳥公園は人によって育てられ、そして野鳥公園が人を育てていきます。

野鳥公園は**新たなコミュニティ**を育みます。それは皆さんと公園との新しい関わりとなり、共働によるパークマネジメント（公園運営）を介して、人と人とのつながりを育んでいきます。

野鳥公園は**魅力あるまちづくり**へ展開します。それはアイランドシティというまちの成長とともに生きものの命を育み、そして持続可能なまちとして子どもや孫たちの世代へと繋げていきます。

concept

成長する野鳥公園

～人と自然が共に成長し続けるために～



III-2 基本方針

計画のテーマに掲げた3つのキーワード「成長」、「新たなコミュニティ」、「魅力あるまちづくり」を計画の基本方針とする。ここでは、方針ごとの具体的な達成イメージを提示し、成長する野鳥公園とそこに関わる人々やコミュニティ、周辺環境の成長との関係性を示す。

(1) 方針1：成長とは

空間として、また自然としての野鳥公園は、多くの来訪者が利用しながら関わりを持つことで育てられていく。野鳥をはじめとする生物の生息状況変化を監視しながら整備手法を決定する「順応的管理手法」を導入し、初期段階においては、多くの市民と共働で様々な活動を行うことで時間をかけながら成長する空間としての必要最低限な整備を行うこととする。

一方で、野鳥公園という空間は、多様な生物が生息するエコパークゾーンの一部であり、多くの市民を成長させることができる。特に将来の担い手である子どもたちに引き継ぐべき豊かな自然環境がそこには存在し、自然観察などの体験プログラムを通じて、大人も含めた市民誰もが楽しみながら自然への理解を深めることで人としての成長を促していく。

なお、ラウンジカフェ参加者による対話から生まれた様々なシーン（場面）は、すでに成長し始めた証であり、野鳥公園はこのラウンジカフェにおいて誕生したといえる。

方針1：成長



(2) 方針2：新たなコミュニティとは

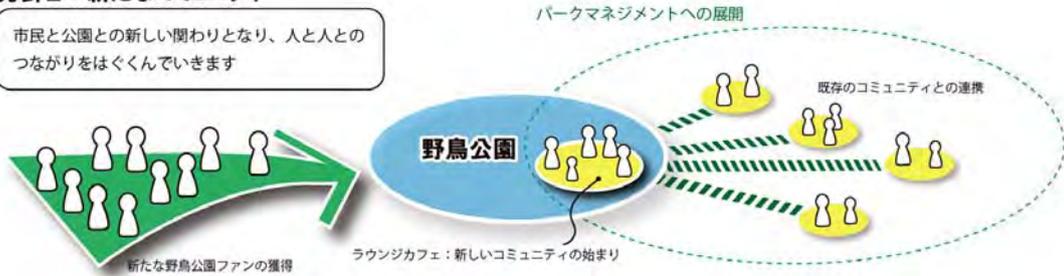
市民と野鳥公園との新しい関わりについては、野鳥公園ラウンジカフェという対話の場で既にスタートしており、継続的に発展させることで公園づくりの計画段階から市民参画ができる枠組みが構築可能である。

また、市民自らの手で作る、育てるといった行動によって、野鳥公園に対する愛着を醸成させ、既存コミュニティとの連携や野鳥公園ファンが増えることによって、さらなる人と人のつながりが育まれていく。

野鳥公園の計画づくりを通じて生まれた新たなコミュニティを公園運営の仕組み（パークマネジメント）として組み込むことで、斬新なまちづくりのモデルケースとなることが期待できる。

方針2：新たなコミュニティ

市民と公園との新しい関わりとなり、人と人とのつながりをはぐくんできていきます



(3) 方針3：魅力あるまちづくり

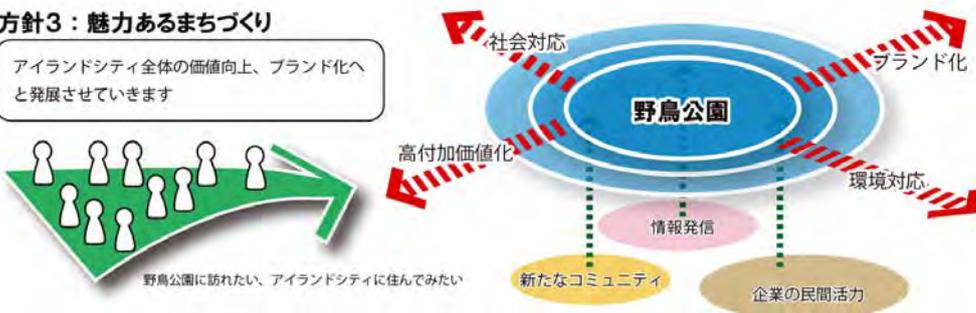
アイランドシティというまちづくりにおいては、人が住みたい、訪れたいといった新しい付加価値の創出が必要である。野鳥公園整備においては、新たな価値創造の可能性を秘めており、魅力あるまちづくりへの展開に寄与することが期待されている。

今後の公園づくりにおいては、サステナブルの視点を重要視すべきであり、環境性、社会性、経済性のバランスを保持した計画策定が必要である。特に既存の公園空間において検討課題となっている経済性（雇用創出、収益向上等）という視点に着目し、民間活力の導入、CSRの観点からの企業参画、地域ニーズに沿ったソーシャルビジネスなど公園内部の事業収益に留まることなく、公園の外部経済効果によるアイランドシティ全体の価値向上、ブランド化へと発展させていく。

さらに、持続可能なまちづくりを進めることで、野鳥公園を含むアイランドシティの豊かな自然環境を子どもや孫たちの世代へ繋げていく。

方針3：魅力あるまちづくり

アイランドシティ全体の価値向上、ブランド化へと発展させていきます



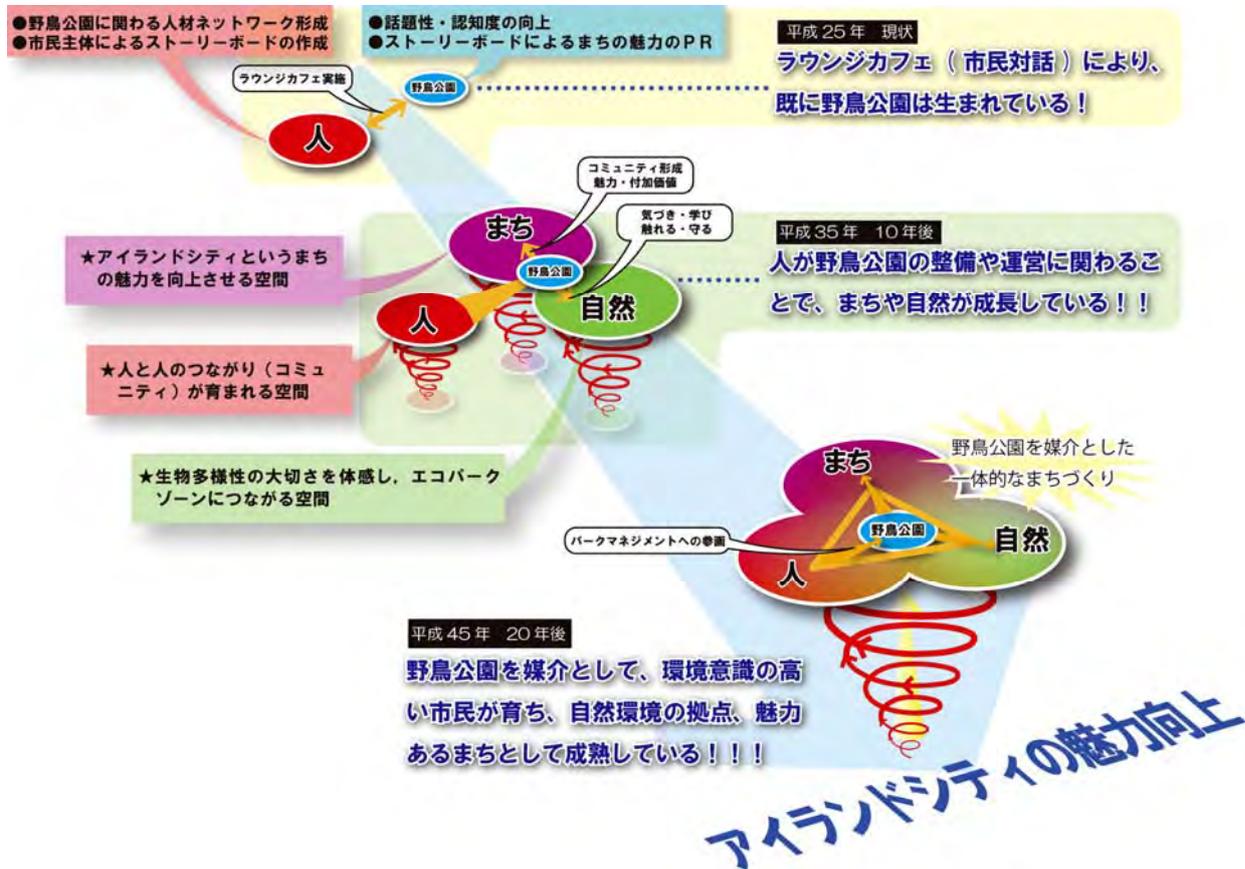
III-3 将来展開イメージ

野鳥公園は、訪れた多くの人々が様々な自然体験や環境学習といったアクティビティを享受することや、長い時間をかけて野鳥公園を含めた周辺の空間が緩やかに変化していくプロセスを共有することで、驚きや感動と共に自然環境の素晴らしさや生物多様性の大切さに気づくことを可能にする空間である。また、従来の公園のように、竣工した時点で完成となるのではなく、野鳥公園を中心としたエコパークゾーン全体で、市民と共働で管理運営を行い続けるシステムの構築を目指していく。

下図に示すように、現状においてはラウンジカフェの実施というアクションにより、人材ネットワークの形成がスタートしている。これは、野鳥公園そのものの話題性や認知度の向上につながるものであり、この時点で既に野鳥公園は生まれ、育ち始めている。

また、10年後には、野鳥公園を通じて自然に触れ、そして守っていくことで、その価値に気づき学びを得ることができるなど、人が野鳥公園の整備や運営に関わる新たなコミュニティ形成こそが、まちや自然の成長に繋がっていくと期待される。

こうしたプロセスを経て、時間とともに変化していく空間を見守ることが、「人が野鳥公園によって育てられる」、「人が野鳥公園を育てる」という相互関係を構築し、野鳥公園を媒介とした人と自然とまちとの新しい関わり、すなわちパークマネジメントが構築され、その結果として、環境意識の高い市民が育ち、魅力あるまちとして成熟し、ひいてはアイランドシティの魅力向上につながることを期待される。



図：成長する野鳥公園の展開イメージ

第Ⅳ章 野鳥公園の活動プラン

Ⅳ-1 市民が求める野鳥公園のあるべき姿：ストーリーボード

基本コンセプト、基本方針をイメージしやすくするために、市民が野鳥公園に求めるあるべき姿を、人の成長段階に応じたストーリーとしてまとめた。また、野鳥や大地など異なる立場からの視点を加えることで、野鳥公園の多様性を高めている。

両親の若き日



先月、私たちの新居のポストに「アイランドシティで野鳥公園づくりが始まります！どなたでも参加できます！」という1枚のチラシが入っていた。どうやら、アイランドシティに野鳥公園が整備されるみたい。でも、野鳥公園ってどんな公園なんだろう？

野鳥公園が何なのかはよく分からないけど、将来私たちの子どもを連れて行けるような公園ができるのは嬉しいし、何より自分が公園づくりに参加できることなんてめったにない機会だから、夫と参加してみることにした。

この話し合いのことは「ラウンジカフェ」っていうみたい。カフェだなんて、なんだかワクワクする！ラウンジカフェにはいろんな人たちが来ていて、「子どもと一緒に家族で楽しむことができる公園になるといい」って発表してる人がいた。私と同じ事思ってる人がいるんだと思うとすごく嬉しい。他にも、野鳥の目線から考える人、子どもの立場から考える人、それぞれの意見が「なるほど」と思うことばかり。ラウンジカフェの帰り道、夫とも「公園ができるのが待ち遠しいね」と話しながら帰った。

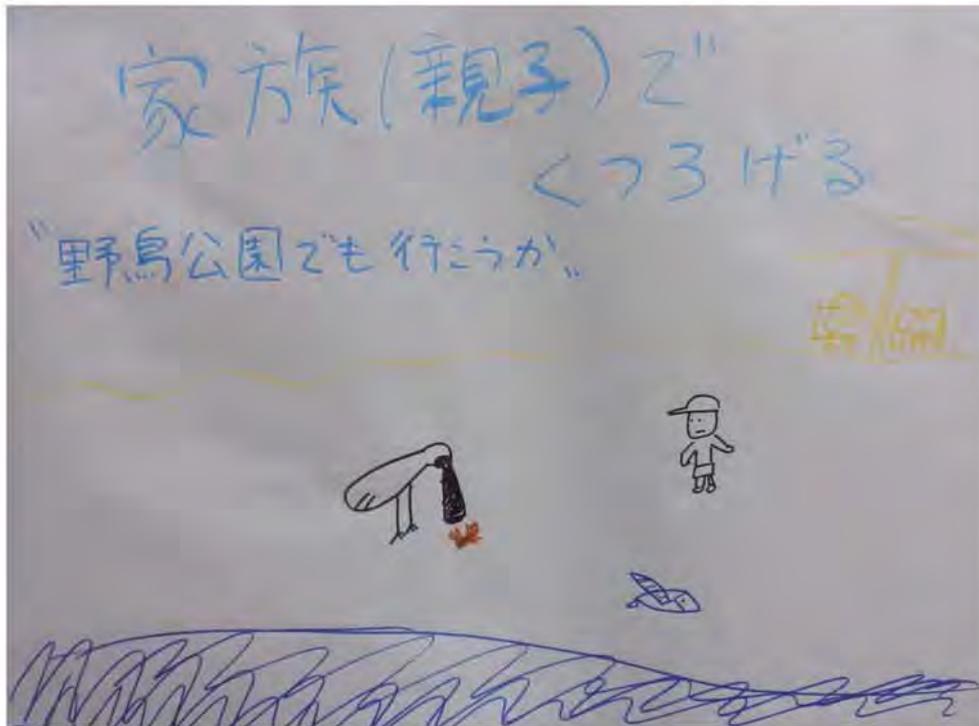
アクティビティのキーワード

- ・ 市民参加の公園づくり
- ・ 対話（ダイアローグ）
- ・ 意見を語り合うラウンジカフェ



すべての物語は このラウンジカフェから始まった

誕生



野鳥公園のオープンまであと3年。オープンまでの期間も、一緒に野鳥公園をつくっていこうという主旨で、今年以降に生まれた赤ちゃんは特別に、誕生記念植樹をさせてもらえる。「これから公園とともに成長していこう。」という意味が込められているそうだ。今年の春に生まれた僕を連れて、両親は記念式典に出かけた。

樹木のネームプレートには僕の名前と生年月日、そして手形が入っている。両親は毎年この木と並んで成長する僕と、そして成長する野鳥公園をバックに、家族写真を撮ることにしたみたいだ。

入口でもらった公園のパンフレットには、オープン後の色々な場面が描かれている。芝生広場や眺めの良い場所、森や水辺などを目にした両親は、オープンまでに一部開放される予定の芝生広場に、今度おじいちゃんおばあちゃんも連れてピクニックに来ようと話している。

アクティビティのキーワード

- ・海を見ながらくつろげるピクニック
- ・誕生記念植樹
- ・オープニングに向けたどんぐりの植樹（小学生対象）



新しく家族になったきみと、新しくオープンした野鳥公園で
野鳥とともに成長する家族のストーリーが始まった

子ども時代（幼児）



僕が歩けるようになってから、母親と毎日のように野鳥公園にお出かけ。来年に本格オープン控え、園内の色々な場所が姿を見せ始め、そしてそこには既に野鳥が訪れている。

お気に入りの場所はなんといっても干潟と淡水湿地。潮干狩りやカニ遊びができるし、泥んこになってもお母さんに怒られない、絶好の場所だ。雨の日はガイダンスセンターに行って、珍しい野鳥を見たり、いろんな野鳥が載っている絵本を読んで過ごしている。

日曜日は、お父さんも一緒に公園にお出かけ。お母さんがチェックしてくる親子参加の公園づくりプログラムにいつも参加するんだ。

今日は、森の中を歩ける木道づくり。少し歩きにくいところがあって、いつもラウンジカフェで話し合っているお父さんお母さんたちが思い立って木道をみんなで手作りすることにした。今まで危ないからお母さんと手をつないで歩いてたけど、木道ができたら一人で歩いてみようかな。

アクティビティのキーワード

- ・ 干潟と淡水湿地であそぶ（潮干狩り、カニ遊び）
- ・ 鳥のさえずりを聞きながら家族で散策（木道を寄付）
- ・ 観察センターで親子で野鳥観察
- ・ 野鳥に関する絵本を読む
- ・ 市民による公園づくりプログラム



駆け回っていた幼き日の記憶

そばにはいつも母の笑顔があり、そして野鳥がいた

子ども時代（小学生）



僕の通っている小学校では1年生から6年生まで50人が所属する「エコクラブ」というのがある。干潟の生き物観察をしたり、夏はいそ遊び、秋は木の実拾いなど自然観察を行っているクラブだ。クラブの一大イベントは、なんといっても夏のエコキャンプ！野鳥公園に泊まって、友達と自然についての勉強や遊びをする行事だ。

公園を管理する人から、和白天潟や公園に住んでいるたくさんの生き物のことを携帯ゲームを使って教えてもらったり、外に出て野鳥観察会や、地域の人が教えてくれる「塩づくり」や「ノリづくり」教室もあって、次はどんなことができるかわくわくする。翌朝は楽しみにしている鳥のさえずりを聞きながらの散歩、早起きしなきゃ。

そして、毎年、エコキャンプのいろんなプログラムを終了すると称号がもらえる。

1年生のときはエコリーダーだったけど、3年生の今年はついにエコリーダーの称号をもらった。来年は誰より早くエコマスターの称号をとるぞ。

アクティビティのキーワード

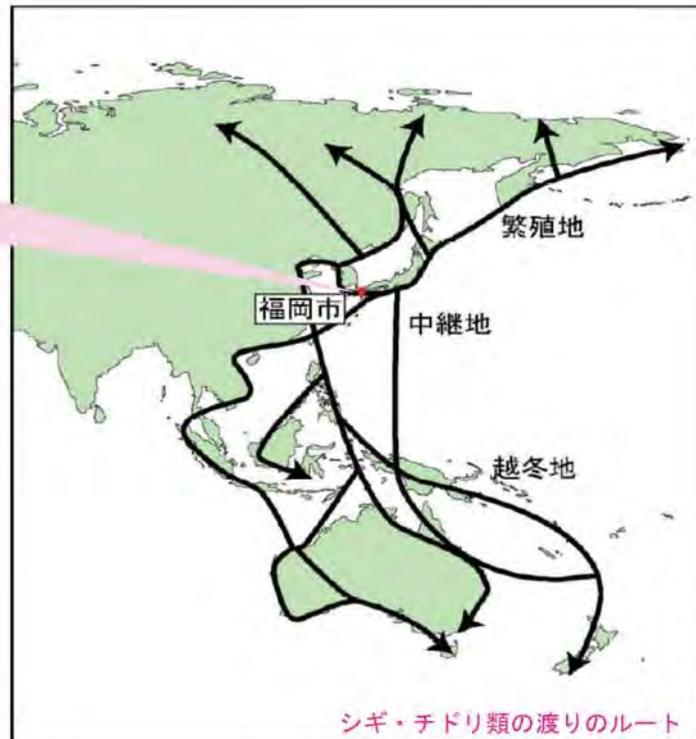
- ・エコキャンプでの野鳥観察会
- ・携帯ゲームを使用した環境参加型プログラム
- ・自然観察のクラブ活動
- ・周辺の小学校による遠足
- ・干潟の生き物観察や体験学習
- ・夏はカニ遊び、秋は木の実拾い
- ・地域の「塩づくり」や「ノリづくり」学習



誇らしげな僕らの胸には キラリと光る勲章が

楽しみながら過ごした日々は 少し大人になった証

【トピック：野鳥の視点①】



僕は野鳥のハマシギ。エコパークゾーンに来てくれているみんなにはすっかりおなじみになったかな？
ちょっと前までは、この辺りで休息場所がなかったけど、この秋に来てみたら、随分変わっていてビックリしたよ。

なんでも、和白干潟近くのアイランドシティで工事をしているのは知っていたけど、その工事が終わって、いよいよ野鳥公園がオープンしたんだって。

今回も昨年と同じように博多湾に飛んできたら、その眼前に広がる光景にびっくり！僕らの休憩におあつらえ向きの石組みが整備されていたよ。まさかこんなお・も・て・な・しを受けるなんて、ちょっと前までは想像できなかったからね。近所のスズメは陸地で砂浴びに夢中みたい。すっかり常連なんだなあ。

今日も石組みの上で仲間たちと羽を休めていると、野鳥公園の観察小屋から、子どもたちが息をひそめて僕らのことを見ていたよ。

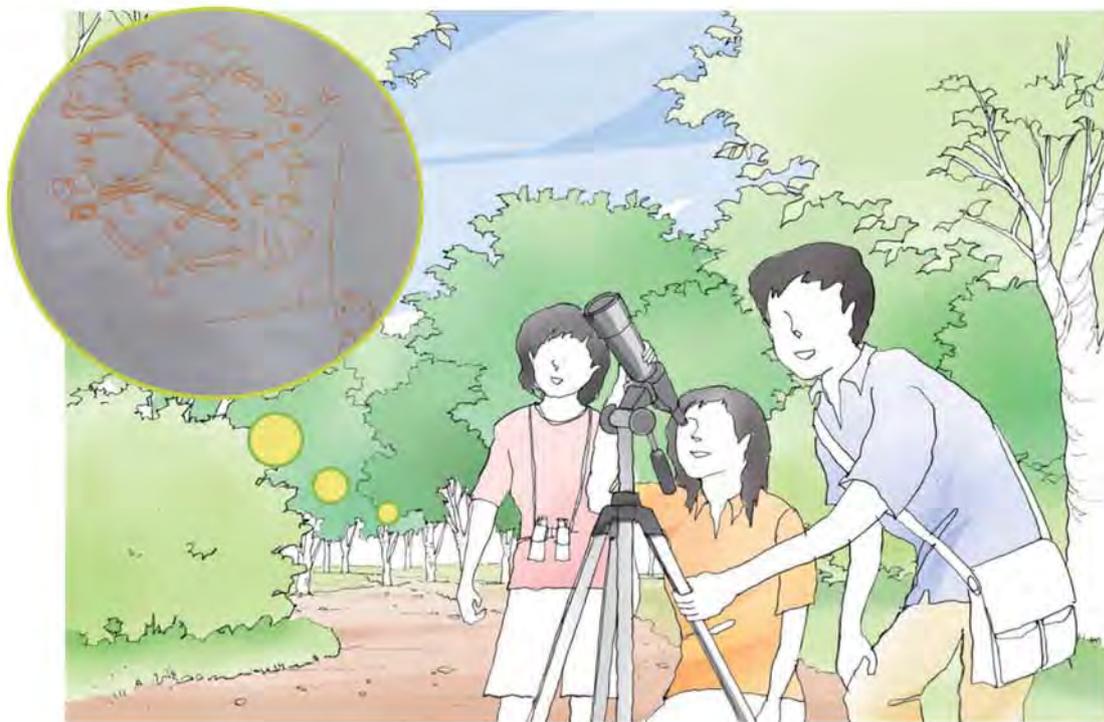
アクティビティのキーワード

- ・ 観察小屋からの野鳥観察
- ・ 野鳥の休息場としての石組み
- ・ 鳥が少ない夏は干潟観察
- ・ 野鳥の砂遊び



あれはなんだい？ あれは野鳥公園さ 野鳥公園ってなんだい？
市民みんなの学びの場さ そして 僕らのための 空間さ

子ども時代（中学生）



今日は月1回の博多湾エコプロジェクトの日。プロジェクトリーダーの呼びかけで、近くの小・中学校をはじめ、地域のいろいろな人たちが参加して取り組んでいる。

野鳥公園の中の鳥たちの住みかは、博多湾全体でみると、ほんの一部だ。博多湾全体を居心地良くして、公園にたくさんの鳥たちが飛来できるようにしたい。それがこのプロジェクトの目標。

プロジェクトでは博多湾の清掃を行うクリーンアップ活動もあれば、公園に鳥のエサや住みかとなる植物を植えることもある。

今日は、プロジェクトリーダーに専門的アドバイスをもらいながら半年前から進めてきた、干潟に生き物を定着させるプロジェクトの第一弾。前回、企業の人に提供してもらった廃材を仕掛けたので、その経過観察に来たところ。経過は良好！アサリやカニや小魚がたくさん住みついていた。

僕たちには快適な公園でも、生きものたちにとってはまだまだ環境を良くしていく必要があるようだ。

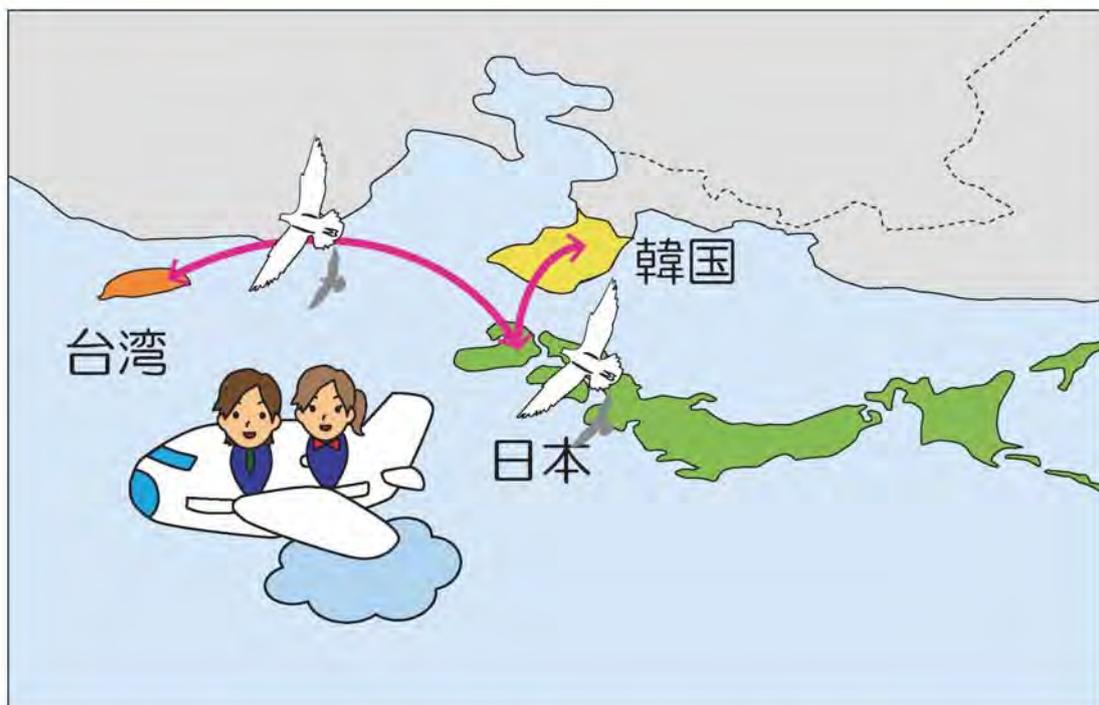
アクティビティのキーワード

- ・野鳥公園主催のエコプロジェクトに参加（クリーンアップ活動等）
- ・エコプロジェクトへの企業協力
- ・干潟や淡水湿地の野鳥観察会



初恋の君が参加するからと 思い切って参加したエコプロジェクト
新しい世界に触れて 僕は野鳥に恋をした

高校時代



僕は、子どもの頃から野鳥公園でいろんな活動に参加してきたけど、高校でも野鳥部に入って、仲間たちと一緒に野鳥公園に飛来する鳥の観察をし、記録をつけている。土日には、地元のエコクラブに所属する小学生を相手に、野鳥公園に来る鳥の生態や野鳥観察のポイントを教えたり、落ち葉や木の実を使った工作をしたり、野鳥公園子どもネットワークの拡大に向けて、勢力的に活動中だ。

今年の冬休み、クロツラヘラサギが行き来する韓国から留学生がやって来た。今回は留学生との交流を僕たち野鳥部が責任を持って引き受けることになった。留学生には期間中、クラブ活動に参加してもらって、野鳥公園の取り組みを紹介したり、実際に足を運んで日本の野鳥の生態を観察してもらった。

留学生は「野鳥公園があるから韓国で育った鳥たちは安心して日本に飛んでいけるね。韓国の人みんなにも僕たちの故郷にいた鳥は元気だったと伝えたいな」と笑顔で話してくれた。

野鳥を守っていくためには世界とつながって、協力の輪を広げていかなければならない。

アクティビティのキーワード

- ・ 飛来する鳥の観察、記録
- ・ 野鳥に関する講演会への参加
- ・ エコクラブとの連携
- ・ 野鳥を通じた国際交流イベント
- ・ 部活のフィールドとしての活用



いつしか僕は 野鳥のように 海を渡り
まだ見ぬ世界へと 羽ばたこうとしていたのかもしれない

【トピック：野鳥の視点②】



僕は野鳥のオオヨシキリ。その名の由来は、ヨシの茎を切り裂いて、中にある虫を捕食するからってことになっているんだ。

これまでは室見川河畔なんかには行ってただけど、最近エコパークゾーンに完成した野鳥公園に、とても居心地のいいヨシ原が自生しているっていう話を仲間に聞いて、早速やって来たってわけです。

これまで、他の仲間は、結構エコパークゾーンにお邪魔していただきただけど、僕らみたいなヨシ原を住みかにする野鳥にとっては、あまり居心地がいい場所がなかったんだよね。でも、ようやく待望のヨシ原が広がったってことで、他にもたくさんの野鳥が来るようになるんじゃないかな。ここのヨシ原は最高だと思うよ。この間も、フィールドスコープを覗いていた人と目があったけど、みんな僕たちのことが大好きみたい。いずれにせよ、僕らにとっては、いろんな選択肢が増えるってことは歓迎すべきことだと思うよ。これが野鳥公園だね。

私はツグミ。

アキグミがそろそろ食べ頃だからいただきに来ました。この辺にある木は私が生まれる前、お父さんたちが立花山で食事したあと、野鳥公園に立ち寄ってフンをして、その中にあった種が芽生えたものなの。

まだ木は大きくないけど、私がここに来たときはいつも先客が何羽もいるわ。先日はムクドリに会ったけど、あと何年かしたら立派な木々になるから、子どもや孫たちのためにも今のうちに良いねぐらを見つけとかなきゃって張り切ってるみたい。

今日止まった枝には、板のようなものが下げられていて、人間の字は読めなかったけど・・・私の写真が貼ってあったの！私がこの木にいつも止まっているのをみんな知ってるのかな？

普段人間のことは意識してないけど、私たちのことをそっと見守ってくれたら、これからもたくさん鳥がきて、自然豊かな森になるわ！



「最近 僕らにとって 居心地のいい場所ができたみたい」

「あそこでしょ アイランドシティの野鳥公園！！」

学生時代



子どもの頃は頻繁に通っていたけれど、学生になってからはすっかり足が遠のいてしまっていた。ここ野鳥公園に久しぶりに訪れることになったのは、大学のインターンシップのためである。

子どもの頃、両親が自然あふれる場所に頻繁に連れて行ってくれたおかげか、大学では生き物の生息環境の保護に関係する分野を専攻した。就職活動を目前に控えた時期になって、昔よく遊んでいた野鳥公園でインターンシップの受入があることを知り、2週間の実習をお願いした。

まず、昔と公園の様子がずいぶんと変わっていて驚いた。聞くと、ここは和白干潟という大きなスケールで人と野鳥が居心地よく過ごせる環境をつくり続ける、進化を止めない公園なのだ。

実習では、普段は園路部分にしか入ることのできない自然にまかせるエリアに足を踏み入れ、状況確認調査やメンテナンスをやらせてもらえる。これは野鳥の生態を近くで感じながらの緊張感がある作業だ。

僕以外にももう一人インターンシップ生が来ていた。彼女は野鳥が食する植物を使って、公園に来た記念になるお土産品の開発に取り組んでいるとのこと。野鳥の生態を伝える良い取り組みだと思う。

人と自然が共生できる環境づくりは公園から発信できることを知り、将来の選択肢を広げることができた。

アクティビティのキーワード

- ・野鳥に関する研究や論文制作
- ・野鳥に関する学会の開催
- ・傷ついた野鳥の保護・手当
- ・お土産品の開発
- ・自然モニタリング活動
- ・インターンシップの受入



僕が野鳥公園に戻ってきたことは おそらく必然だったと思う
いま幼き日の記憶よりも 大きく成長した野鳥公園と僕がいた

社会人



野鳥公園に居心地の良いカフェテラスが誕生した。

公募で選ばれた、エコ活動に力を入れている企業が運営しているだけあって、体にやさしいメニューが充実している。賃料に加え、店舗での売上げの一部を野鳥公園運営の費用にあてているようだ。

私も、地域社会参加などの地域貢献活動を行っているかどうかを判断材料のひとつに就活し、現在は会社のボランティア活動で野鳥公園での清掃活動に参加している。

また、このカフェでは、月に一度「ラウンジカフェ」という語り合いの場が開催されており、この公園の今後についてお茶を飲みながら様々な人たちがアイデアを出している。

セグウェイやレンタサイクルというアイデアも、とある企業が気に入ってくれて、広告付き車体の寄付で実現したものだ。野鳥公園で知ったエコパークゾーンの見どころまで気軽に出かけられようになって本当に便利だ。



アクティビティのキーワード

- ・野鳥カフェテラス (ソーシャルビジネス的活動)
- ・セグウェイ・レンタサイクルなどでアイランドシティを散策
- ・野鳥公園を拠点とした活動 (ラウンジカフェの継続)
- ・自然観察のための市民交流の拠点



野鳥とともに過ごす くつろぎのひととき
みんなが集まり みんなが笑い みんなが対話する場ができた

結婚



結婚を機に、新居を探すにあたって迷わずアイランドシティを選んだ。小さいころから通っていつか、野鳥公園の近くで暮らすのが夢になっていたからだ。大学時代のインターンシップで知り合った他県育ちの妻もこの事はよく知っていて、あこがれの住宅地だったそうだ。

引っ越して半年が経過したが、休みの日は公園でのエコガイドとして活動している。子どもの頃、ラウンジカフェや体験プログラムに参加して皆で協力してつくった園路を見るたびに、幼き思い出がよみがえる。

妻も公園で開催されている「野鳥が食する植物によるガーデニング講座」に通うことを手始めに、ここのコミュニティ活動に参加しつつある。自宅の庭に野鳥が飛んでくる日も近いかもしれない。

ちなみに、婚約指輪の購入には少しこだわった。指輪の売り上げの一部を野鳥公園に寄付するという特別限定品で、この企画に賛同したデザイナーが無償でデザインしたというプレミアム商品だ。

ここからこの地で、野鳥とともに新たな家族との幸せな思い出をたくさんつくっていききたい。

アクティビティのキーワード

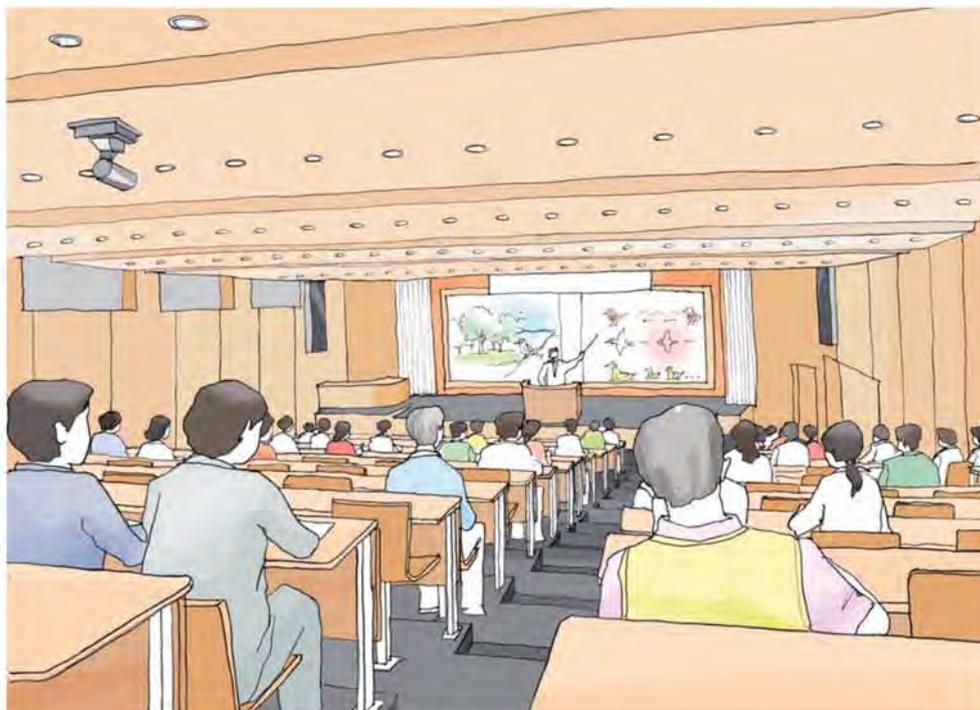
- ・結婚記念品の購入（寄付）
- ・アイランドシティへの移住
- ・地域コミュニティの成熟
- ・野鳥が食する植物を庭に植える
- ・野鳥公園ファンド
- ・エコガイド



鳥たちと 誓いを胸に 旅立つ日

新しい家族のストーリーが また1ページ加わった

壮年期



ここ数年でまちとして成熟したアイランドシティへの関心が高まり、アイランドシティへの観光客がぐっと増えた。野鳥公園の先進的な取り組みが注目を集め、アイランドシティ全体のイメージが向上したためだろう。野鳥に関する国際会議も増え、公園には野鳥観察をする外国人旅行客の姿も多くなった。

野鳥の森が成長し餌場や営巣場が豊富になり、観測される野鳥の数が増えたことと、四季折々の景色が素晴らしいこと、市民や企業が協力して施設や運営を充実してきたことが要因だろう。

また企業によるCSR活動の先駆的な事例として、視察や研修に訪れる企業や自治体も多い。この公園の管理運営には様々な団体が関わり、企業経営手法の長所が取り入れられているため、来園者の満足度が高いとのことだ。

ラウンジカフェの初期メンバーがこれまでパークマネジメントの中心を担ってきたが、そろそろ世代交代が必要ということで、最近では若い人にも参加者から運営者の視点に立つよう指導を心掛けている。

※CSR…企業が事業活動において利益を優先するだけでなく、様々なステークホルダーとの関係を重視しながら果たす社会的責任。

アクティビティのキーワード

- ・ 樹林地、餌場の充実
- ・ 観光客の増加（特に海外からの来場者増）
- ・ 企業によるCSR活動、研修、企業PRの場
- ・ パークマネジメントへの参画



野鳥がつなぐネットワーク

日本や世界を越えてみんなが笑顔でやってくる

熟年期



子どもも独立し、会社の定年を迎え第2の人生が始まった。そういえば、私が生まれた時に、両親と一緒に植樹したヤマモモの木を久しぶりに見に行ってみた。ネームプレートは古ぼけていたけど、空に向かって広げた枝には、たくさんの鳥たちがとまっており、懐かしい昔を思い出させてくれる。

最近、野鳥公園でのガイドボランティアの養成講座の講師と、地域安全見守り隊での活動でけっこう忙しく、やりがいを感じている。

子どものころから参加してきた自然モニタリング活動のデータの積み重ねにより、公園の維持管理マニュアルも完成しつつある。

野鳥を通して交流が続いている海外の愛鳥家を訪ねる旅も企画中だ。野鳥公園に関わることで私の人生も何倍も充実したものとなったと感謝している。

アクティビティのキーワード

- ・ ガイドボランティア養成講座
- ・ 海外の愛鳥家を訪ねる旅
- ・ 世代間交流
- ・ 維持管理マニュアルの充実
- ・ ラムサール条約登録を目指す活動

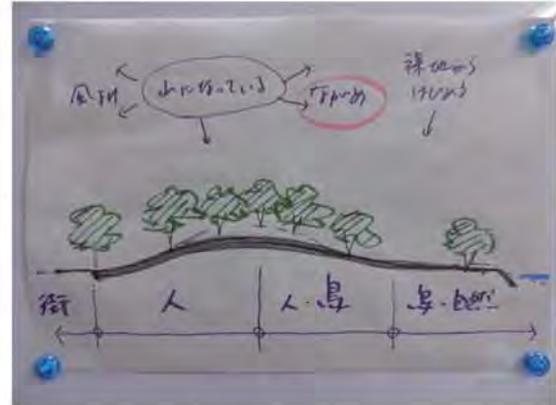


「ありがとう」 っていうのは照れくさいけど
僕と君と一緒に育ったこの野鳥公園に恩返しをしたいんだ

【トピック：海と大地の視点】



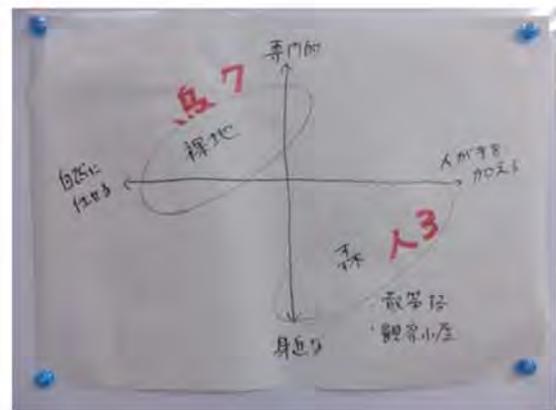
美しい風景を創っていくことも大事な視点。
様々な生き物にとって快適な空間が、きちんと維持管理されていけば、美しい風景もそこに生み出されるのではないだろうか……



アイランドシティの中にも森があるといい。
森が自然と育っていく中で、人のエリア、野鳥のエリアが形成されていく。一部は小高い山のようにっており、街への北風を防ぎ、海への眺望点となる。



生物多様性の受け皿となる空間が必要。
干潟は多くの生き物の共生の場となる。
人はそこで繰り広げられる生き物の営みを通じて、自然そのものを学ぶことができる。



どこまで作り込むのかをきちんと考える。
例えば裸地を準備して、自然の営みに任せながらその反応を見守るというやり方もあるかもしれない。

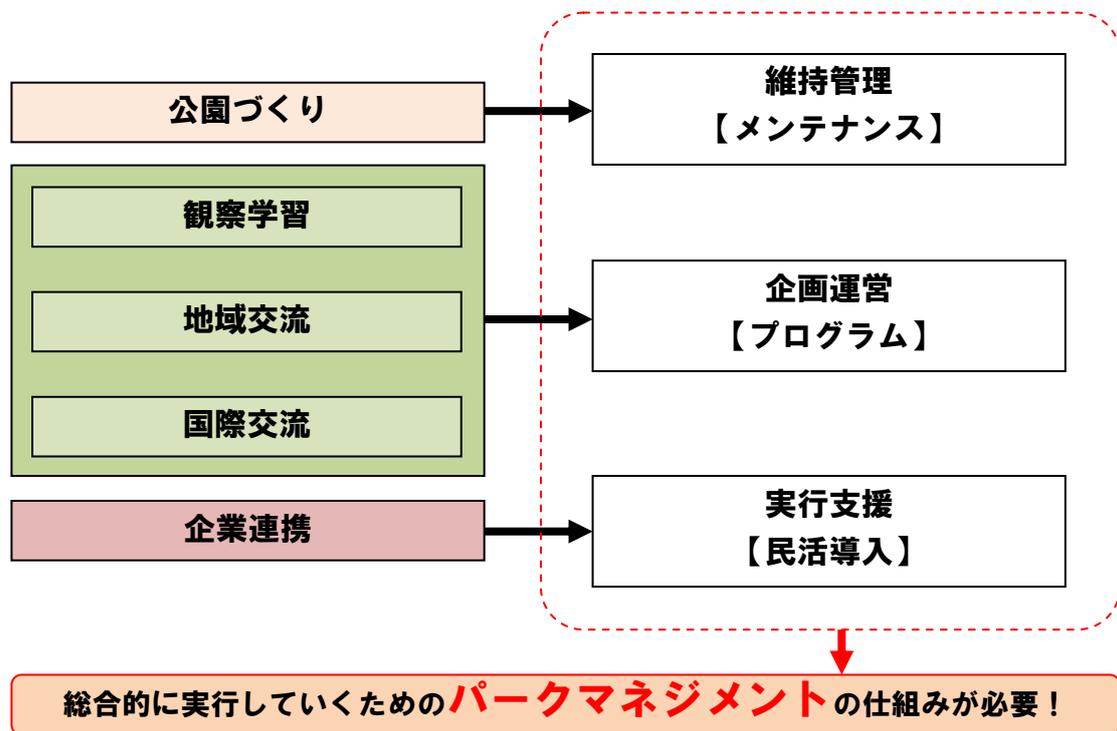
元気な土、きれいな水、生きた湿地 たくさんの生き物に囲まれて
年をとればとるほど愛されて、未永くこの地に根付きたい

IV-2 実現に向けた体系化

市民が求める野鳥公園のあるべき姿を実現していくためには、それらを実践していくための空間と、動かしていくための仕組みが必要となってくる。

そこで、ストーリーボードにまとめられているアクティビティを以下の5つのグループで整理し、体系化した。

なお、管理運営の視点からみた場合、メンテナンスやプログラム、実行支援などを総合的に実行していくための仕組みとして、近年においては、**パークマネジメント**という形で管理運営機能を高める試みを実施されている。



図：野鳥公園の管理運営に求められる機能

IV-3 実現に向けたスケジュール

(1) 公園づくり

野鳥公園の整備が始まり、運用、維持管理に至るプロセスは、継続していく公園づくりとして位置づけることができる。地域住民や市民が主体的に関わることで野鳥公園をつくり、育てていくという機能が求められている。

公園づくり			
対応する活動	実施時期		
	短期 (H25～H34)	中期 (H35～H44)	長期 (H45以降)
オープニングに向けたどんぐりの植樹 (小学生対象)			
誕生記念植樹			
維持管理マニュアルの充実		----- 内容の更新	-----
市民参加の公園づくり		----- 簡易な維持管理作業	-----
対話 (ダイアログ)		----- 継続実施	-----
意見を語り合うラウンジカフェ		----- 継続実施	-----
市民による公園づくりプログラム			
野鳥が食する植物を庭に植える			
野鳥の休息場としての石組み			
野鳥の砂遊び			
傷ついた野鳥の保護・手当			
植林地、餌場の充実			



(2) 観察学習

自然から様々なモノやコトを学ぶことのできる機能は、将来を担う子どもたちにとって必要不可欠であり、野鳥公園に求められる大きな機能の一つである。

観察学習			
対応する活動	実施時期		
	短期 (H25～H34)	中期 (H35～H44)	長期 (H45 以降)
エコキャンプでの野鳥観察会			
自然観察のクラブ活動			
地域の「塩づくり」や「ノリづくり」学習		継続実施	
夏の磯遊び、秋の木の实拾い		継続実施	
エコプロジェクトへの参加（クリーンアップ活動等）		継続実施	
飛来する野鳥観察とその記録		継続実施	
野鳥に関する講演会への参加		継続実施	
エコクラブとの連携		継続実施	
部活のフィールドとしての活用		継続実施	
野鳥に関する研究や論文制作		継続実施	
自然モニタリング活動		継続実施	
エコガイドの育成		継続実施	
インターンシップの受入			継続実施
干潟と淡水湿地での遊び（潮干狩り、カニなどの生きもの）			継続実施
干潟の生きもの観察や体験学習			継続実施
携帯ゲームを使用した環境参加型プログラム			継続実施
ガイダンスセンターや観察小屋での野鳥観察			継続実施
野鳥に関する絵本を読む			継続実施

(3) 地域交流

地域住民や近隣小学校の日常的な利用、またそれらを支援するための組織運営や体制構築等
地域コミュニティの成熟を図りながら、さらに新しいコミュニティを創出していく上での基盤
となる機能が求められている。

地域交流			
対応する活動	実施時期		
	短期 (H25～H34)	中期 (H35～H44)	長期 (H45以降)
ガイドボランティア養成講座	――	――	――
海を見ながらくつろげるピクニック	――	――	――
野鳥公園を拠点とした活動（ラウンジカフェの継続）	――	――	――
自然観察のための市民交流の拠点	――	――	――
世代間交流の推進	――	――	――
野鳥カフェテラス（ソーシャルビジネス的活動）	――	――	――
パークマネジメントへの参画	――	――	――
鳥のさえずりを聞きながら家族で散策（木道を寄付）	――	――	――
周辺の小学校による遠足	――	――	――
土産品の開発	――	――	――
アイランドシティへの定住	――	――	――



(4) 国際交流

世界につながる、アジアの玄関口として、国際交流の拠点となるための機能が求められている。

国際交流			
対応する活動	実施時期		
	短期 (H25～H34)	中期 (H35～H44)	長期 (H45以降)
野鳥を通じた国際交流イベント			
野鳥に関する学会の開催			
海外の愛鳥家を訪ねる旅の実施			
観光客増加の取り組みと対応			
ラムサール条約登録を目指す活動			

(5) 企業連携

各種プロジェクトへの個別協賛や、公園の企画運営全体に対する支援を含めて、パークマネジメント全体の体制支援としての民間活力の導入や積極的な企業の公園利用等が求められている。

企業連携			
対応する活動	実施時期		
	短期 (H25～H34)	中期 (H35～H44)	長期 (H45以降)
エコプロジェクトへの企業協力			
企業によるCSR活動、研修、企業PRの場			
セグウェイ・レンタサイクルなどでアイランドシティを散策			
結婚記念品の購入 (寄付)			
野鳥公園ファンド			

○パークマネジメントとは

公園を管理運営する仕組みのこと。市民が中心となって公園の活用プログラムを作り出して、多様な主体と連携しながら、利用増進を図るとともに、持続的に楽しめるコミュニティを創出する。



行事の共催
(地域連携)



自然観察会
(NPO連携)



維持管理作業
(ボランティア連携)

○野鳥公園にパークマネジメントを導入する効果

近年における社会課題は複雑化の一途を辿っており、一般的な公園利用の観点をはじめ、公共福祉への対応や外部経済的な考えに基づくエリア全体の魅力向上など、公共空間としての公園に求められる期待は非常に高まってきている。

今回、活動プランを総合的に実行するためのパークマネジメントを導入することで、社会課題を解決する一助となり得る可能性を秘めている。そのためのモデルを野鳥公園にてチャレンジする価値は非常に大きいと考える。

